

機動戦士ガンダム 青き流星のツダ

ツダ神様

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ジオン公国軍が正式に採用するMSの選定試験に置いて、重大な欠陥を晒し敗北したMSが存在した。…基礎スペックに置いてライバルである「ザク」を圧倒した悲劇の機体、型式番号EMS-04「ツダ」

歴史の闇に葬り去られたその機体は、時代を経てEMS-10と言う新たな名を受け新生、ジオン公国宇宙軍のこれからを担う次世代機として第603技術試験隊に配属され…そしてまた同じ欠陥を晒して世界の晒しものとして嗤われた…そうして葬り去られたはずだった

しかしその機体は、最初の選定試験でテストパイロットを務めた、現ドブル・ザビ指揮下の宇宙攻撃軍に所属する「狭間の妖精」と恐れられたエースパイロット「マシヤール・V・エイドリアン」手に渡ること、正史とはかけ離れた戦果を積み重ねていく

これはゴーストファイターと、それに魅せられた一人の妖精の物語である

目次

序章	1
序章	2
序章	3
序章	4
序章	5
一年戦争編	
第1話 再会	42
第2話 過去を想う	50
第3話 相棒と戦友と	60
機体解説 ツダ	72
第4話 束の間の休息	75
第5話 流星は軌道上を駆ける	81
第5話 流星は軌道上を駆ける	91
後編	

## 序章

コクピット内に警告音が鳴り響く。機体が大きくはないが。しかしはつきりと感じ取れるほどの揺れと共に音を上げて軋み上がり、四肢を盾のように広げた影響か装甲が剥がれ落ちて内部の機構がどンドン露出していき、更に今まさに防いでいるコロニーレーザーの勢いに呑み込まれて機体がバラバラになりそうになっているのを、己の執念ただ一つで縫い留める

最早言葉すらも絞り出せない。そんなことに使う余裕はない。今の自分を動かすのは贖罪ただ一つ。世界を、宇宙を破壊した張本人として、果たさねばならぬ贖罪だけが彼を突き動かしていた

コロニーレーザーの圧力はすさまじく。自分達が共鳴展開したサイコフィールド一枚だけではとても支え切れるものではない。すでに中心部から背後のメガラニカへ光が漏れだしている

耐えろ もうここで俺の命が燃え尽きようとも構わない だから耐えてくれ

応えてくれ そう自身の愛機へと告げる。一年戦争から幾度の改修、修復を繰り返して最新造されたと言っても過言ではない愛機は、その言葉に応えるように、今まで殺して来た人の意志と、救えなかった人の意志を混ぜ合わせ、それまで灰色に光り輝いていたサイコ・フィールドを霧のように不定形に揺蕩いながら、ヘドロのようにへばりついて来そうな、おどろおどろしい何かを携えた黒色のサイコ・フィールドに切り替わり、漏れ出していたコロニーレーザーを完全に塞いでしまう

自分の中の何かが…自分と言う存在が塗りつぶされていく…そして、それが死であると言う事が良く理解できた

これでいい これでいい 死ぬことで償える。ようやく終わることができる

長かった ああ長かった でも 何故私は今 こんなにも寂し

いのだろう 何故 どうして  
ああ どうして あの頃を懐かしんでしまうのだろう 今更  
どうして

「マシヤールさん!!」

少年の 声が聞こえる どうして なぜ 恨んでいるはずの彼が  
あり得ない 何故

何故 死にたいはずなのに私は喜びを感じられる 烏澁がましい  
はずなのに 何故

何故 私は もう一度生きたいと願うのだ

23年前：宇宙世紀0073 ブラックコロニー周辺暗礁宇宙域内

MS試験場B

「これよりジオン公国軍。次期主力機の最終選定試験を実施します」  
管制官の言葉に、俺はパイロットスーツのヘルメットのバイザーを  
降ろし、操縦桿をしっかりと握りなおし足のポジションをもう一度確  
認しなおす。ツイマッドの威信をかけて建造されたMS、私自身が今  
まさに搭乗しているEMS-04 ツダはまさに傑作機と言えた。  
基礎スペックに置いてライバルジオニックのザクを圧倒し、機体の運  
動性、機動性に置いては比べるまでも無く圧勝と言える状態だった。  
負けるわけがないのである

そして、この最終選定試験では残ったザクとツダが2機一組で挑む、最初は暗礁宙域内の指定コースを走破する1次試験、続いて標的となるデブリを破壊する2次試験、そして最後にザクとツダによる模擬戦闘の最終試験の3試験で構成されており、まずは同時スタートの1次試験である

「始めッ！」

管制官の言葉にペダルを踏みこむ。命令のままに木星エンジンを起動したツダはスタートダッシュからザクからリードを奪い、ぐんぐんとその差を開いていく

デブリの中を軽やかに飛び回る姿に、選定試験の為に訪れたジオン軍の将校たちは皆ツダに対しては期待を、敗けているザクには諦観を向けて喋り、それを後ろで聞いていた双方の技術スタッフは言葉こそ出さないが表情やしぐさを使って煽りあい、二者の間で激しく火花を散らす

「に、2番機に異常ッ!!」

そんな中、モニタリングしていたツイマッドのオペレーターの悲鳴のような報告が上がる。その直後、私の少し後ろを並走していたシャーム少尉の機体が限界を超えた加速を始める

「き、機体が減速できない!? 誰か助けてくれ…! 助けてくれええええええええええ!!」

オペレーターのイヤーマフにシャーム少尉の悲痛な悲鳴が聞こえている最中、ツイマッドの技術スタッフたちが機体状況をリンクさせた画面を見て絶句する。機体の推力とエンジン負荷が計測不能。つまり完全に暴走していたことが表記されていたのだ。そして

シャーム少尉のツダが火をつけたマツチのように燃え上がったかと思うと、まずは四肢から、そして頭部や胴体が熱と加速による負荷に耐え切れずにバラバラに分解しながらデブリに激突して大爆発を起す

この瞬間。最終選定試験は下手をすればエンジンの制御不能が原因で機体が空中分解してしまう危険性を持つツダから、暴走の心配も

無く、優れた拡張性と汎用性、量産性を持ち、安定しているザクに決めたのだった…

そして、時は無情にも流れ…6年後。彼は憎きジオニツクのザクに乗り込み、戦場へと飛び立っていた

## 序章 2

宇宙。それは人類にとって最後のフロンティア。地球と言う星を何時しか揺り籠と呼び始めたあの日から、地球は宇宙へと進出しようとする人類を縛り付け、太陽系の探索すらもろくに出来ないまま。人類は地球の周りで生活し続けていた

「全機スクランブル。軌道上にて連邦軍のパトロール艦隊を確認。数はサラムミス級2隻。敵艦載機が存在するかは不明。マシヤール隊はこれを撃滅せよ」

そしてそんな時代が続く中で、地球に縛られた人々は、巣立てた人々を搾取するようになった。人を人とも思わぬ愚かしき行いに、ついに宇宙に出た人々は反旗を翻した

「マシヤール・V・エイドリアン、出撃する！」

反旗を翻した者の名は、ジオン。巣立てた人々の独立の為に、地球に縛り付けられた人々を開放するために戦う道を選んだ：そう私たちだ

「各機敵を食らいつくすぞ！ 私に続けッ！」

一気にペダルを踏みこむ。ランドセルのメインスラスターがけたまましい轟音と共に白色に光り輝き、爆発的な推力は暴力的な加速となつて機体を押し出し、幾つものピンク色の閃光が走るその先へと突き進んでいった

「私の名前はマシヤール……マシヤール・V・エイドリアンだ。階級は少佐、所属は宇宙攻撃軍麾下の今年の10月24日に新設された第121地球衛星軌道パトロール艦隊であり、私は一応そのパトロール艦



隊の艦隊司令官にあたる

と言うのはあくまでも形式的なもので、実情は副官に司令官としての任を任せて、もっぱらMSに乗り込み、自由気ままに戦うことを楽しみにしていた

普通の軍隊ならありえないことなのだろうが、それができてきまうのがジオン公国軍と言う軍隊の異常性なのだろう、後俺が所属する宇宙攻撃軍のトップであるドズル・ザビ閣下がそう言うのにめっちゃ優しいのが悪い

「マシヤール機が着艦する！ 回収作業に入れ！」

そして私が指揮する艦隊はムサイ級の後期生産型（以降はムサイ（後）と呼称）が3隻。通常のムサイ級を改装したもので、性能的にはサラミスよりも上らしい：まあ少なくともMSの搭載能力や居住性なんかはムサイなんかより遥かに優れているのは事実だ

そんなことを話している間にガイドビーコンに連動して機体が自動操縦に切り替わる、そのまま俺の乗る機体、まだロールアウトした直後で、一部のエースパイロットにしか配備されていないザクⅡR2：正式名称は高機動型ザクⅡR-2型であり、既に配備に向けて先行生産が開始されたMS-11「ゲルググ」のジェネレーターを流用、実行が進む統合整備計画とも組み合わせり、大型化した試作型のビームライフルと試作型のビームサーベルを装備しており、最近重力戦線で存在が確認された連邦軍のMSに対抗するために急遽スケジュールを前倒して作られたのである

「連動問題なし、オートパイロット異常なし」

各部のバーニアが噴射され、機体を減速させながらゆっくりとムサイ（後）の格納庫に向かって背中を向けると、格納庫から伸びたハンガーとカタパルトを兼ねた固定用ロックに機体を接続させる

「機体関節固定、エンジンカット」

定められた手順に従って機体を停止させる作業を行う最中、直立状態の機体が固定ロックによって水平にされると、そのまま伸ばされたレールの上を走り、機体が格納庫の中に搬入され、機体が停止したら機体を停止させると、スクリーンに外に出るように促してくるノーマ

ルスーツが見えたのでそのままコクピットハッチを開けてからシートベルトを外すと、操縦桿を支えにまずは座席の上に足をつけて屈むように立つと、続けて背もたれに足をつけると操縦桿を離すと、背もたれを蹴ってハッチから格納庫へと飛び出す

「つお疲れ様でした司令官！」

飛び出した先には先程スクリーン越しに私に降りるようサインを送ってきたノーマルスーツの…声からして30は行かない男の声が聞こえてくる。私はそれに

「ありがとうございます。ただあの程度は敵じゃないよ」

と、私は笑顔で男に答え、男はさすがです、と目を輝かせながらそういうと、俺を更衣室とシャワー室を兼ねたパイロットの待機所の方に向かって引つ張ると、両手を下に回してくるのでそれに合わせて俺も膝を曲げて足を男の両手の上に乗せると

「行きますよっ！」

と、声かけをしてから私の体を思いつきり前に押し出す、これで勢いをつけた俺は、足を伸ばすと後ろに振り返り、男はありがとうございますの意味を込めて敬礼し、男もそれに返礼する

その後はさつと待機室でシャワーと着替えを終え、私はいつもの士官服に着替えると、いまだに慣れない士官服の硬い硬い襟に息苦しさを覚えてなんとか広げようと襟を外に向かって引つ張りながらブリッジに入る

「おかえりなさい司令官」

船の艦長であると同時に艦隊の副司令官でもある男が私を出迎えてくれる。男も同じくジオン軍の士官服にニット帽と中々にアンバランスなものを着たくせ毛の銀髪ショートに狐を思わせる胡散臭い、まるで目を閉じているかのように細い目つきの、やけに猫撫で声の男だ

「出迎え…苦労様、やっぱりあいつらもヨーロッパ方面への補給を断つための部隊だった。ろくな護衛も無かったよ」

仕留めたサラミス級2隻だけの艦隊…ですらない特攻部隊を思い出しながら副官にそう話すと、副官は何かを考えるようなわざとらし

い表情のまま、腕を組んで右手で顎を触ると

「最近かなり増えてきてますよねえ…やっぱり噂は本当だったことでしょうか？」

と、私に尋ねて来る。私はそれがここ最近士官以下の連中の間で流行っている連邦の欧州反攻が近々行われると言うものだとして理解した私は、鼻でそれを笑うと

「事実だとしても、欧州は北米からの輸送が主な補給手段だ。上からの透過はあくまでも不足している軍需物資だが数だつてそんなに大量じゃない。ここで奴らがやつてる無意味な特攻は戦略的には何ら影響を及ぼさない無駄死にだよ」

と、ただただ自分の持論を述べる。それは正しい事だが、副官の答えに対しての回答では決してない。それをわかつてはいるが、副官は彼があえて答えを避けたことを理解し、ふん、と軽く鼻を鳴らすと「ま、それで我々の評価をわざわざ上げに来てくれるのですから、良い事ではないですか」

と、副官が組んでいた腕を解いて肩を竦めた直後、オペレーターが二人の会話に割り込むようにこう報告した

「司令官、後任の第213パトロール艦隊です」

オペレーターがそう報告した直後、角無しの兜のようなヘルメットを被った恰幅の言い男がメインモニターに映し出される

「おおドレン大尉が後任でしたか。これならば安心してこの宙域を託せますよ」

と、私は心からの喜びを込めてそう言つて両手を上げる。それにドレンも上機嫌に笑うと

「ハハハ！ 狭間の妖精からそうも信頼して頂けるとは感激の極みですな！」

と答える。私とドレンは戦前から面識があつたのだが、ルウム戦役の際、彼の上官である「シャア・アズナブル中佐」…いや当時は大尉だっただろうか？ 彼と肩を並べて戦い、最終的に私は被弾してしまい、彼の乗艦に乗せてもらったことをきっかけに彼とは交流を持つことになったわけである

「報告書には目を通しましたが、随分と敵が来たようですねあ…」

ドレンの労うような尋ね方に、私はそうなんだよ、と露骨に疲れた様子を示しながら

「最近ヨーロッパ方面の衛星軌道はひっきりなしに敵が来るもんだからもうくたくただよお…」

と、何とも階級が下の物しか周りにもモニターにもいないはずなのに気の抜けた…ともすれば上官にふさわしいとは間違っても言えない姿をさらす私を、怒る者はおらずとも呆れ笑うものたちばかり

「アツハツハツハツ！ 相変わらず、おかしな方ですね貴方は！」

と、豪快に笑うドレンに侮蔑や嘲笑は含まれておらず、私が乗る艦のブリッジクルーたちもそれは同じだった（直してほしいな、という期待は向けられている）

「だからドレン大尉も気をつけた方がいいよ。連中こっちの対処能力を見極めるつもりでぶつけて来てる感じがするからさ」

と、釘を刺す俺に対してドレンも笑いを止めると、打って変わって真面目な顔で

「ご忠告感謝します。慢心は自分が最も嫌いな単語でありますので」

と言った直後、オペレーターが時間です、と告げてくるのでそれに分かったよ、と返し

「ではドレン大尉、時間も押しておりますので我々はここで、続きはまた今度、ソロモンで出会った時に」

とそう言っただけで私が敬礼すると、それに合わせて副官やブリッジクルー全員が敬礼する。それにドレンも返礼と共に

「ハッ！ 少佐殿も存分に英気を養われてください！」

と答え、そこで通信は終わり、私の乗艦を含めたムサイ（後）2隻がゆっくりとドレン大尉指揮下のキャメルパトロール艦隊、の左横を通り抜けてソロモンへ向かう

「司令官。予定通り連邦の警戒線とキャメルパトロール艦隊の捕捉範囲を抜けました」

と、オペレーターがそう言った直後、私は先ほどまでのおちやらけた、おとぼけたと言ってもいい調子から一変

「そうか」

と、まるで氷でできた暗器のように鋭く冷たい印象を感じさせる冷淡な声で応えようと、こう命令した

「現時刻より偽装進路を解き、作戦に従ってルナツー近海へと進路を取る」

少し裏話をしよう。今回、私が率いる121パトロール艦隊はドズル閣下からの勅令を受け、キシリア閣下直属のジオン海兵隊の監視を目的に、同海兵隊が行うルナツー強襲作戦に参加することとなった

そもそもの経緯はルナツーの兵器工廠で生産されていると言う連邦軍製MSの情報収集、可能ならば実機の鹵獲か残骸の回収と現時点でのルナツーの戦力把握を目的に立案されたこの作戦は、宇宙攻撃軍と独立機動軍の両軍による連携作戦として立案され、主に宇宙攻撃軍は実働部隊として活動する海兵隊の補給など後方支援を任とすることとなるのだが、悪名高いジオン海兵隊：蔑称「シーマ海兵隊」に対してドズル・ザビが信用ならない海兵隊だけで作戦を任せられないと

私たち121パトロール艦隊にシン・マツナガ大尉をつけて実働部隊として参加させる：としたのだが

ところがこれ、嘘である

いやまあ正確には建前とか方便とか表向きとかつくタイプのもので、実情は「え？ 海兵隊やばくね？ この冷遇と身内差別はあかんやろ」と実情を知ったドズル閣下が精一杯足りない頭を捻った結果なのである

ようは補給だとか後方支援で難癖付いたりちやんと仕事しないとか差別がないようそう言うのが大大大嫌いな私と武人としての面がくそ強いうえに誠実なマツナガ大尉は鉄拳制裁くらいはしそうなので恐らく最良のメンツと言える

「へえ、あんたがああの有名な狭間の妖精様かね。てつきりひ弱な小娘かと思ってたよ」

そしてジオン海兵隊旗艦、ザンジバル級「リリー・マルレーン」の艦橋に上がり、司令官である「シーマ・ガラハウ中佐」に出会って、開口一番に言われたのがこれである、噂に違えない素行の悪さだが、実情を知っていると、こう：なんというか、そうせざるを得ない彼女の境遇に哀れみを抱いてしまう

「っ……」

その気持ちが顔に表れていたのか、彼女は露骨に不機嫌そうに顔を顰める、さらに私がしまったと思っってはっとすると、彼女は呆気に取られた後に、面白そうにけらけらと笑い出す

「あっはっはっ、アタシ達に対して隠そうともしないやつは何人も見てきたが、まさか初対面で同情してくるなんて、軍人とは思えない純情少年じゃないさね」

艦橋内にはどう判断すればいいのか、と私に敵意を向けていたクルー達は互いに顔を見合わせるかシーマの方を見るばかりだが、彼女はそうやって私を見下ろすと、カラカラと笑っていた。しかしその笑顔の中に、艦橋に初めて入った時に感じたこちらを値踏みするような視線と激しい憎悪の感情を感じることはなかった。

「しよっ、初対面でいきなりなんだシーマ中佐!?! だいたい私はもう

少年と呼ばれるような歳ではないんだぞ!? 君よりは一回りは離れているんだぞ!」

と、この幼い顔立ちと158cmの低身長のせいによく誤解されるが、私はこう見えてももう25歳の立派な男なのである…まあ、そう見られたことはほぼないが……

「あはははは! 坊やが背伸びなんてするもんじゃないよ、ここが小さいから男に見てもらえないのさあんたは!」

と、私の抗議を受けてさらに初対面に対してとはとても思えない失礼な、侮辱とも取れる物言いである、しかしまあ彼女自身からは見下しているような悪い印象を感じ取れなかったので、作戦のためにもここは仲良くするための第一歩にしよう、と割り切った私は、絶対にこの作戦後はこいつと関わらないからな! と心の中で強く決意しながら

「なっ!? い、いくら上官とはいえあまりにも失礼がすぎるぞ! 私だってこの見た目でも男に見てもらえるように精一杯努力しているんだからな!」

と、わざとらしく両手を振って怒ると、それにシーマは意地悪げに笑いながら

「それで男らしく見てもらおうなんておかしな話だね、どうせ女受け狙って可愛こぶってるだけだろう? アタシは騙されやしないよ!」

と、こつちの意図に気づいたのかは分からないがノリに合わせてわざとらしく額を右手の人差し指で小突いてくる

「うわっ!」

しかし小突く力がかなり強い、指一本だけのはずなのに手で押されたかのような力強さに驚いた私は声をあげて後ろには後ずさるも、それを見たシーマはまるで「ほら、坊やだ」とでも言いたげに笑っていた

「こ、こけにしてえ?」

と、流石に役とかノリとかでは済ませなくなった私が素の怒りを向けた瞬間である、私以外の人間には一切聞き覚えのない咳払いが響き渡る

「オホン！ そろそろマツナガ大尉がいらつしやる頃ですし、下のものに示しがつかないのでお二人共そこらでじやれ合いはやめてくださいね？」

と、いつもかすかに微笑みを携えているはずな顔を真顔にしてそう言った私の副官の全身から溢れ出す怒りのオーラに、俺は冷や汗を浮かべながら顔をかすかに引き攣らせ、シーマも背中に氷を押し当てられたかのような冷たさを覚えたことから

「怒らせたらまずいなこいつ…」

と判断し、即座に

「あ、あはっはっはっはっ！ いやわるかったねえ少佐？ いくら何でもちよつと言いすぎたよ！」

「いえいえ中佐殿！ お気になさらず気にしておりませんので！」

と即座に笑顔で握手しながら和解する私たちの姿に、デトロローフらリリー・マルレーンのブリッジクルーは全員は啞然とその様を眺めることしかできなかつた

その後マツナガ大尉を乗せた補給艦がすぐに到着したので、私たちはマツナガ大尉を含めて、全員でブリーフィングルームで今回の作戦についての説明を受けた

「ふむ…流石は海兵隊。見事な用兵だ」

と、説明を受けたマツナガ大尉は顎に手を添えながら、海兵隊が立案した今回のルナツ―強襲作戦をそう評価した

「どう思う？」

私も副官に尋ねてみる。正直常道からかけ離れたものな上に、南極条約的にはグレーもグレーの行為ではあるが、―は、あれば確実に作戦を成功させることができる。そう確信できるほどの内容だった

「…正直に申し上げれば危険な賭けです。上手くいけば損害もほとんどなしで作戦を達成できるでしょうが、失敗すれば確実に生きて帰っては来れませんよ？」

と、素直に答える副官の顔には、いつも通りの余裕を携えた微笑み



があつた。それに私は

「うちの副官がこう言うなら、間違いないってことなので、我々は指揮権を海兵隊にお譲りします」

そう、この作戦の要となるのは適切なタイミングと統制の取れた艦隊運動にかかっている。そこで海兵隊は増援として送られた我々を臨時で組み込みたいと言ってきたのである。俺自身は作戦内容を聞いて、道理であると判断したためにこうして許可を出したのだが…

「…本気かい、あたしらに部下の命を預けると?」

と提案した側が突如言い出してくる謎の不具合である。いやまあそう聞く意味は良く分かる。なんせジオンの汚点とまで言われた悪名高いジオン海兵隊だ、同じジオン軍の中で、酷い連中は彼ら彼女らを人とも思わないってやつらもいると聞いたことはあるが

「今回の作戦は孤立無援の特殊作戦。戦力はザンジバル1隻とムサイ10隻。これでルナターの艦隊とバトルして新型機を鹵獲するか残骸を回収しないといけないなんて無理無茶無謀の三拍子そろった任務をやらされるつてのに、同じ味方を信用しなくてどうすんだよ」

少なくとも私は極限状態と言っても過言ではないこの極秘任務の前に詰まらないプライド云々を拘って死ぬのはごめんだ。その気持ちとありのままに告げると、副官のデトローフは殊更に驚いた顔をしてなんか一步後ずさったまま固まって、副官は表情微笑みのまま後ろで手を組んでるし、マツナガ大尉はよく言ったみたいなさつきりした顔のまま横目で俺を見るばかり。そして

「ハッ、こりや驚いたね…酔狂で言ってるなら後悔することになるかも知れないよ?」

と、シーマは虚を突かれたかのように、真顔とも驚きともとれぬ顔をしながら、次の瞬間には眉をひそめながら真剣なまなざしでそう言ってくる。その言葉を私は鼻で笑う

「なっ!?!」

それを見たデトローフは驚き、シーマはピクリと眉が動く。私はそのままこう言い放った

「私があなた方を信頼したのは酔狂なんかじゃなく、ドズル閣下から

資料として渡された海兵隊の戦歴を拝見した上での決断です。：まあ、確かに海兵隊がこれまで実施して来た作戦はどれも危険性が非常に高く、損耗率も高い上に口に出すのも憚れるような恐ろしい任務でしょう」

事実だ。現に亡命者の粛清やスペースノイドの非協力的な難民の排除、連邦の病院船の破壊にサイド6から地球への物資を運ぶ民間団体の保有船舶を焼き払ったりと、文字通り非合法部隊の名に恥じぬ活躍ぶりだ

「…それを離反者を出すことも無くこなしてきたのです。それが組織に対する忠誠なのか、それともまた別の要因によるもののかは私の知るべきことではないでしょうが、私はその能力から部下たちを任せるに申し分ないと判断した。ただそれだけです」

そう、私が信じたのはそこだ。どれほど非合法的な任務に従事していようと、彼女たちは任務を放棄したことはただの一度もなく、仲間の命を常に第一に考えながら忠実に任務を達成してきた。だからこそ部下の命を預けてもいいと、そう私は思えた訳である

「…いささか言葉足らずだろうが。私もマシヤール少佐と同じ思いです。中佐殿」

と、これまで口をつぐんでいたマツナガまでもが同意を示す。それに驚くばかりのデトローフと、驚きと言うよりは動揺の色が隠し通せないシーマに対し、マツナガは続けて

「私は武人だ。見たままにしか物事を捕らえられぬ阿呆だ…その阿呆から見て、あなた方は信を置くに値する方々であると小官は確信しております。是非私を指揮下に置いていただきたい」

お願いしますと、そう言って深く頭を下げるマツナガに、私も同じく深く頭を下げる

「私と、部下たちの命をよろしくお願いします」

と、そう私が言うのに合わせ、副官は無言のままに私と同じように深く頭を下げる

その下げられた頭に、さしものシーマも、状況を飲み込めぬままに首を縦に振り、承諾を示すことしか出来ないのであった

## 序章 3

この日のルナツーはいつもと変わらず平穏なままだった…

「…今日もここは外れたままだな」

本来座るべきではない基地司令室の席に座る男、ワツケイン少佐は自分の権限をはるかに逸脱した基地の運営と連邦軍本部からの情勢に関する報告書を読みながら、ジオンと連邦との戦争から隔離されてしまったルナツーの現状を総評した

蛇足的な解説になるが、ルナツーは地球侵攻作戦が始まる2〜3月以降主戦場から離れた僻地になってしまったのである。理由？ 艦隊消し飛んだのと宇宙の拠点がルナツーだけになったから

もう少し詳細に説明すると一週間戦争でサイド駐留軍が壊滅、ブリテイッシュ作戦とルウム戦役で地球軌道艦隊、地上で係留されていた艦隊とルナツーの駐留艦隊が壊滅した結果、地球圏の制宙権を奪われ、残存戦力ではミノフスキー粒子とMSのコンボにとても対抗できないため地球軌道上の制宙権も維持できない有様になってしまったことで戦略的な価値が消滅。そしてそのまま主戦場が地球に映ることでルナツーは半ば良治寧から忘れられた場所と化した訳である

しかし連邦軍がMSを実践に投入し始めたと言う情報が重力戦線で出回り始めると一気に話が変わってきてしまうのである

現状連邦はたったの1基しかスペースコロニーが存在しないサイド7とルナツーくらいしか拠点がなく、大規模な艦船の整備工場と内部工廠付きの軍港を持った軍事基地などルナツーしか無い為、両陣営とも「ルナツーが今後の宇宙での反抗の起点になる」と確信しており、連邦はビンソン計画に基づいて建造したMS搭載能力を持った改修艦を打ち上げ始めており、日に日にルナツーの戦力は増強されているため、早急にこれを叩く必要があるのだが。現実問題としては出来ないのである

理由はシンプルで、重力戦線を支えるだけで精一杯のジオンにルナツーを攻められるだけの国力が無いのである。驚くだろうか？ この時期本土防衛総軍みたいなものを新設しようって言うんで独立機動軍

と宇宙攻撃軍を統合運用しようとしているのだが派閥問題で上手くいかず。おまけに重力戦線の維持を優先しているため宇宙軍の装備改修は遅れてるし人材不足で部隊の補充拡充は夢のまた夢。一番整っているのが最前線で日夜軌道上を防衛する俺達パトロール艦隊だと言うのだから、その惨状は最早口では説明しきれないレベルである

そんなわけで、ルナツーは平穩そのものだった訳なのだが、気を休める暇もなく日に日に表情に陰りが見え始めていたワツケインだったが、そんな彼の表情どころか胃や頭髮に凄まじい衝撃を与える警報が鳴り響いた

「なっ!?!」

突然鳴り響いた警報に驚き、手に持っていた書類をデスクに叩きつけたワツケインは、すぐさまデスクに埋め込まれたモニター付きの端末を操作して司令部を呼び出す

「何が起きた!?!」

ワツケインの代わりに司令部で防衛、防空を指揮していた副官の顔が出るや否やそう叫んだワツケインに対し、副官もまた焦燥にかられた顔でこう返した

「そ、それがポイントC4でミノフスキー粒子濃度が急激に上昇したと思ったら、そこからジオンの船が突如として現れました!」

「何だとツ!?!」

想定をはるかに上回る副官の報告に、思わず席を立ちあがりそう叫んだのだった

「さあさあ一世一代の大舞台だッ！ 景気良くぶっばなしちまいな！」

そして場面を転換させ、こちらはルナツターの哨戒部隊の配置交代のタイミングを狙い、ミノフスキー粒子で一時的に目を潰してから一気に射程内にまで接近したジオン艦：リリー・マルレーンの艦橋にシューマが鞭を肩に担ぎ、男勝りにブリッジクルーたちへ発破をかける

「へいっ！」

その発破に砲雷長が威勢よく答え、リリー・マルレーンのミサイル発射管から4発のミサイルが放たれる

「続けてコンテナ投下後面舵一杯！ 後続への道を開けるよ!!」

続けざまに放ったシューマの指示に従いデトローフが威勢よく答えると舵輪を大きく回し、リリー・マルレーンはルナツターの眼前で船体を180度旋回させながら両舷のMSハッチから8メートル程の大きさの長方形のコンテナを発射後、現宙域からの離脱を始める

「敵新型艦よりミサイルと思われる飛翔体を確認！ 数4、距離1200!!」

ルナツター指令室にオペレーターの報告が上がる。一気に緊張感が高まる中、指令室へ向かうワツケインがくるまで指揮を執らねばならない副官は額に汗を浮かべながら

「第2哨戒隊に迎撃させろ！ 即応の第11戦隊を今すぐに出港させろ！ 防空システムは!?!」

矢継ぎ早に命令を飛ばす副官の言葉を速やかにオペレーターが伝え、ルナツターの哨戒に当たっていた4隻のサラミス級がミサイルを主砲で迎撃する。すると破壊されたミサイルの数百倍、数千倍の規模のピンク色の煙と大量のミノフスキー粒子が放出される

「み、ミノフスキー粒子です!?! ポイントA1〜C5、A1〜D4の範

囲に超高濃度のミノフスキー粒子が散布されています！ レーダー及び光学機器は全て使用不能！ スモークの影響でルナツー正面の有視界も封じられました!!」

と、オペレーターが報告する。それに副官はしまった、と敵の意図を察して悔しげに顔を歪めると

「第二哨戒隊にスモークを迂回して正面の警戒にあたらせろ！ 要塞からミサイルを射出し！ それを爆破させることでスモークを散らして視界を確保するんだ！ 第11戦隊はまだ出撃しないのか!？」

と矢継ぎ早に指示を飛ばし、司令室の中にある戦術テーブルに映されたルナツーを上から見下ろしたような構図で作成されたMAP上にはルナツーの正面を覆う大量のスモッグを迂回しながら前進する第二哨戒隊の4隻のサラミス級を表示していた

「迎撃用対艦ミサイルを射出します！ 第二戦隊は今第3ゲートから旗艦ニュージールランドが出港しました！」

とオペレーターが副官に報告した直後、宇宙港のゲートから出撃したマゼラン級戦艦ニュージールランドの両舷を通過するように、要塞表面に設置されたミサイルサイロから放たれた12発の対艦ミサイルが射出され、スモークの中に入ると同時に概ね定められていた時間通りに自爆し、その爆発を持ってスモッグを吹き飛ばす

「視界の確保に成功しました。既にジオン艦の姿を捕捉できず、逃走したと思われます……レーダー含め光学機器は以前使用不能」

スモークがかき消されてクリアになった視界に、既にリリー・マルレーンの姿はなく、副官は単なる嫌がらせの域を超えた敵の行為に對して

「(これだけで終わりとは思えないが……) 第2戦隊に周囲の索敵を命令。第1種戦闘配備はこのまま、今動かせる戦力は全て展開するぞ、敵の襲撃がこれで終わるとはとても思えん」

と、もしもに備えて追加の命令を下した直後、指令室に繋がる唯一の扉が開き、やや衣服や髪型が乱れ、肩で息をするワッケインが入室してくる。それを見た副官が漸く来てくれた本来自分がいまこなししている責任を負うべき人間……しかも信頼できる上司たる存在の登場

を歓喜で持って出迎えようとした

その瞬間。副官はすさまじい衝撃により世界を揺さぶられるかのような感覚に陥った瞬間、自身の体を襲った浮遊感と、体が風を切る感覚を知覚するよりも速く、激痛によって彼の世界は暗転した

ここで一度読者の皆様にも今回の作戦について話そう

作戦目標はルナツーに存在する敵戦力の調査と、ルナツーで生産されていると噂される敵MSの奪取である。その為に我々はリリー・マルレーン自体すらも囷とした極めて大胆グレーな作戦を実行した

まず第一段階として高速艦であるリリー・マルレーンが単艦で敵防空圏内に侵入、超高濃度のミノフスキー粒子入りの煙幕が入ったミサイルを散布して後続の突入を援護、それと同時にMS奪取が目的の陸戦要員が乗ったランチを入れた黒塗りのコンテナを射出する

第二段階で4基の衛星ミサイルに海兵隊の中から選りすぐった精鋭と私、そしてマツナガ大尉の三名で構成されたMS隊を括り付けて射出、コンテナの投下地点でMS隊は切り離して離脱させ、ミサイルはそのままルナツーのスペースゲートから内部の宇宙港に突入させることで敵に衝撃と混乱を与える

そして第三段階ではMS隊がコンテナを衛星ミサイルにより破壊されたスペースゲートから敵要塞内に侵入、端末を利用して施設内にハッキングを仕掛けて情報を引き抜き、MSを鹵獲するとともに生産設備を爆破、その後陸戦隊はランチで要塞を離脱し、再度突入したり





ゲートを通過すると宇宙船ドックからニュージーランドに続いて出港した直後のサラミス級1隻をニュージーランドと同じように撃沈させると、ドックに停泊していた哀れなマゼラン級に直撃した

直撃を受けたマゼラン級は衛星ミサイルの圧倒的な衝撃により艦体に衛星ミサイルをめり込ませながら後ろに押され、そのままドックの壁に激突するとミサイルの圧に耐えきれずに艦体の中程からへし折れて天井に激突。そのまま大爆発を起こす。この間わずか30秒と満たないが、これらの被害により連鎖的に発生した爆発は、巨大な火柱となつてスペースゲートから宇宙へと柱る

「突入！」

それを合図に私達に護衛されたコンテナ持ちのリック・ドム達が真っ赤に光るスペースゲートからルナツールの宇宙港へと侵入していく

「各機突入地点を全力確保！ 近づく敵は全て排除しろ！」

ビームライフルを両手持ちに切り替えながらそう命令する私に、マツナガ大尉を含め全員が威勢よく応えたのだった

場面を再びルナツール基地司令室へと移す。衛星ミサイルの直撃と、要塞内で起きた艦艇の爆発により深刻なダメージを受けており、司令室に詰めていた者は副官を含めて全員が床に叩きつけられており、半数近くが意識を失い床に倒れており、残り半分で満足に動けるものは更にそのうちの半分以下で、無事なものなど皆無な有様だった

指令室自体も衝撃の影響か天井の一部が剥がれて床に散乱し、設置された設備の一部が破損していたり、モニターの一部が落下しその下敷きになっているものもいた

「うっ……うっ……」

入室した直後のワッケインへと振り返った副官も衛星ミサイル直

撃時の衝撃で床に叩きつけられ、落下した天井の一部により下敷きになつてしまつていた

「わ、ワーグス大尉!？」

肩に天井の破片が突き刺さり、血を垂れ流しながらも倒れた副官に気づいた部下がその声を上げる。それに気づいた数人の部下たちが副官と、その後ろで出入り口の扉に手をかけ、もう片方の手で倒れた際に痛めたわき腹を抑えながら立ち上がろうとするワツケインの元に駆け寄つて来る

「う……ぐう……」

部下たちの懸命な救助作業により何とか瓦礫から解放された副官は意識を取り戻し、痛みには呻きながらも起き上がろうとするも、それを部下たちが止めに入る

「動かないで下さい大尉!　すぐに救護部隊がここに来ますから!」

と、そう言つて左足が潰れた状態で尚も立とうとする副官を止める中、副官は口から血を垂れ流し、血を吐き出しながら

「だ、だめだ……ここと基地全体の損害状況と、敵の索敵を……」

部下の制止を無視して命令を下そうと、自らの職責を果たそうとする副官の、果たす為ならば死ぬこともいとわなめと言う気迫、覚悟を現したかのような形相に気圧された部下たちには無理やりにも彼を止めると言う選択肢を選ぶことが出来なかつた

「もういい大尉、良く働いてくれた」

それを、いつのまにか彼の左隣にまで来ていたワツケインが副官の肩にそつと手を触れ、そうねぎらいの言葉をかける

「……ワツ、ワツケイン……しれ、い……か……ん」

ワツケインを見上げた副官は、はつと驚いた顔をした後、安堵の表情を浮かべながらワツケインの名を呼び、そのまま起こそうとしていた上体がゆつくりと横たわる

「みんな、済まないがワーグス大尉のことをよろしく頼む」

ワーグスが死んだのではなく気を失っただけだと理解したワツケインは。立ち上がると部下たちにそう言つてから帽子をかぶり直し、大きく深呼吸をしてから

「今よりルナツターの指揮は私が執る！ 基地内の被害状況を直ぐにまとめて送るよう各部署に伝達！ 全哨戒隊は速やかにルナツター周辺の哨戒結果を報告させろ！ 駐留艦隊は全て出撃準備だ!!」  
と、良く透き通る上に、張りのある力強い声が指令室の中を響き渡る

「…了解ッ！」

ただそれだけでルナツターの士気は取り戻される。皆が絶望を打ち払い行動する姿を見ながら、ワツケインは矢継ぎ早に指示を下す

この瞬間より、ルナツターの反攻が始まった

## 序章 4

「碌に抵抗がありませんな…」

4 隻目のサラミス級のエンジンとブリッジを破壊し、武装を潰してただのダルマにして放置する作業を終えたマツナガ大尉がそう言うて手に持つザクマシンガンのマガジンを交換する。因みに大尉が乗っているのは大尉のパーソナルカラーの白に塗装された高機動型ザクR―IIである

この機体はビーム兵器を扱うP型ではないためビーム兵装は熱々変えないが背部ランドセルに追加されたハードポイントによりザクIIよりも多くの武器を搭載でき、更にウエポンラック等様々なオプションへの感想を可能としており、P型よりも幅広い任務に対応できるだけでなく、燃料積載量もザクIIに比べて25%増えたことでより長時間の戦闘行動も可能と多機能、高性能な機体に仕上がっているのが特徴である

「そうだねえ…もしかしたら衛星ミサイルが想像以上に敵に打撃を与えたのかも知れないねえ…」

と、長銃身になったビームライフルの両側減の強制廃熱口からたまった熱を排出させながらそう応える

今回私が使うP型が使用するビームライフルはエネルギーCAPやメガ粒子の縮退技術の実証実験の意味合いが強い兵器である。形状は超銃身の狙撃銃のような見た目であり、詳細な説明としては四角い箱型の銃身を六角形の箱型強制廃熱機構をかぶせるような形にしており、銃口は四角い箱型の銃身と同じ大きさの咆哮のような上下から延びるギザギザの歯のような形状をしている

次に後部の話だがこちらはそのまま四角い箱型の銃身と同じ大きさ、形状で、グリップは無く、代わりにグローブのように腕をはめ込む部分があり、このはめ込部分の中にグリップのような持ち手と引き金があるのでこれを握ることで前腕全体を覆うようにして固定させることで片手撃ちの安定度を向上させている他。銃下部はそのまま両手持ちの為のへこみが存在する

また重上部のマウントレールには狙撃を想定して高倍率スコープを搭載しており、ビームライフル自体も収束による精密狙撃モードから、大出力、拡散方式の対艦用大口徑モード、そしてその中間に位置する通常使用のライフルモードの3種に切り替えられるほか、出力を微調整して自由に調整することも可能となっている

最後に強制廃熱機構は両側面の装甲板がが上下に開いて排熱を行うようになってい

「各機周囲警戒を怠るなよ」

と改めて今回自分の指揮下につく海兵隊の面々やマツナガに改めて徹底させる傍ら、モニターに表示されたタイムスケジュールを確認する

タイムスケジュールと現在の作戦推移のずれは僅か2分。かなり理想的な状況だが、予定では陸戦隊のランチが出て来るのは突入から最低で2時間後。現在で突入から30分が経過しているので後1時間半はこの場を維持しなければならぬ訳である

「少佐！ 付近を哨戒していた敵艦隊がこちらに接近しているそうです！」

と、部下からの報告が入る。恐らくは周辺で待機しているリリー・マルレーンからの情報だろう、私は顔をしかめて

「チッ！ 予測よりも速いじゃないか！ 仕方ない。各機持ち場に付け！」

と、命令しつつ手近なサラミスの船体の影に収まるように機体を真っすぐに伸ばし、反対からは見えないように隠れる。それに他の機体も私と同じようにサラミスの影に機体を隠す。そうしてリリー・マルレーンが知らせた敵が戻って来るのをじっと待ちかまふ。すると10分ほどで7隻のサラミス級がバラバラな方向から来て固まり、そこからまっすぐ私たちの方へと正面から近づいてくる

「…撃つな、距離が離れると無力化しにくい。可能な限り引きつけろ」  
いつでも飛び出せるよう身構えつつ、逸る部下たちへそう命令する。部下たちは懸命に私の命令を守り、敵艦隊は我々の存在にまだ気付いておらず、間隔をやや開けた密集隊形でルナツーに接近してきて

いた

「…少佐?」

しかし突然サラミス級が前進速度を落とし始める。それに気づかれたのかと考えた部下が私を呼ぶが、私はそれに素早く

「まだバレてはいない! 落ち着け!」

と返す。もう気付いているのなら隊形を切り替えるか砲撃を始めておくかしくはない距離である(まあルナツーと友軍艦を巻き込みかねないのには思えないが)。つまり速度を下げたのはもつと別の要因があるはずである

「とにかく私が良いと言うまで発砲は禁止します!」

と、重ねて厳命を下す。それに無言のまま命令に従う事で応える部下達。今、このルナツーの中は戦場とは思えないほどの静寂に包まれていた。そして距離が1km以下にまで縮まったところで

「各機攻撃かいし…」

と、命令を下そうとした次の瞬間。私の隣にいたマツナガの乗る高機動型ザクIIの頭部が突如として爆せた

わずか2分前、マツナガや私が隠れるサラミス級フレッチャーのエアロックの扉から外の様子を伺うノーマルスーツにジェットパック装備の兵士がいた

「…」

恐怖からか顔は引きつり、全身を震わせながら必死の形相で私たちに気づかれないよう周囲を索敵する兵士の左肩には、対MSように開発された歩兵携行隊MS無誘導弾…わかりやすく言うとロケットランチャーを担いでいた

「くそ…くそ… くそ! くそツ!! こえええよお…!」

恐怖に震え、涙を流しながらそう悪態を吐く兵士。なぜ彼がこのような蛮勇を働いたのか。それは彼自身の正義感によるものではなく、

ある意味ではもつと純粹で、もつと浅い決意……仲間の仇を討ちたい、敵に一矢報いたいと言う極めて単純な思いで彼は恐怖を抱えたまま外に出たわけである

最も。彼がこうして船外に出ようとするまでにかかなりの時間がかかったが、こうして出てきたのだから大したもののである。そして彼が開けたエアロックは、ちょうど斜めに傾いた艦体の左側面の船底付近。つまりは私たちが隠れているのとは反対側から出たわけである  
「え、あれ……？」

そして、必然的に彼は人間の肉眼でもぎりぎり視認が可能な距離にまで接近してきていたサラミス達の姿を見つけてしまう

「まずい……！ 早く伝えないと……！」

友軍に乗艦を使って潜伏する敵の存在を伝えなければと考えるも、今の自分にはそれを伝えられるような道具はなく、艦内で生きているのも自分だけ、このままではどうすることもできない

「……っ!？」

いや一つだけ方法がある、そう彼は気づいてしまった。その武器とは彼が担いだロケットランチャーであり、これを使って敵を攻撃すればその異変で必ず友軍は気づいてくれるだろう

「はあ……！ はあ……！」

自然と息が荒くなる。担いだロケットランチャーを持つ手が今までは別種の恐怖で激しく震える中、彼は仲間の仇を討つと言う最初の決意に、友軍を守るためと言う新たな決意を胸に、兵士は覚悟を決めるとエアロックのドアを蹴って宇宙に飛び立つと、そのままジェットパックを起動して上昇しつつロケットランチャーを両手に構えて振り返る

「ひっ!？」

出たのはちようどマツナガの乗る高機動型ザクⅡの正面であり、初めて生で見るMS、それも殆どゼロ距離で相対することになった兵士は悲鳴を上げて怯むも、動き出そうとしたマツナガのザクⅡを見て反射的に持っていたロケットランチャーの引き金を引いた

無重力での運用を想定し、ピストンの力で排出されたロケット弾は

エンジンに点火、一瞬のうちにマツナガのザクⅡのカメラアイ目掛けて突き進む。殆どゼロ距離で放たれた致命傷となりうる一撃を、防ぐ手段などある訳がなくそのままマツナガのザクⅡの頭部が爆せた

「やっ……」

そして、その光景を見て歓喜に叫びあがろうとした兵士もまた、ゼロ距離で起きた爆発に巻き込まれ、ノーマルスーツごと肉体をずたずたに引き裂かれながら吹き飛んで行った

「なっ!?! うおおお!?!」

そして場面を再び私の視点に戻す。殆どゼロ距離で起きた爆発に咄嗟に肩のシールドで防ごうとしたものの、爆発の衝撃波により機体がサラミスの影から押し出されてしまう

「しまっ!?!」

頭が一瞬真っ白になってしまいが、今自分の思考が停滞すれば味方が死ぬことを何度も経験していた私は無理矢理思考を稼働させ

「攻撃しろッ!」

と声を張り上げながら片手でマツナガのザクⅡを背後に隠すようにして自身の体で守りながら、両手持ちに直したビームライフルによる射撃を敢行。それにつけて慌てて部下たちも射撃を開始し、戦闘は当初の想定とはかけ離れたものとなってしまったのであった…



## 序章 5

「なにー！ 敵のMSだと!？」

漸くルナツーが被った被害の全貌を把握できたばかりのワツケインの元に届いたその報告は司令室と彼自身に強い衝撃を与えた。あまりに衝撃的な報告に、彼らしくもなく声を荒げてしまう

「は、はい！ 帰還途中のパトロール艦からの緊急伝で、第二哨戒隊の背後に隠れていた模様！ 数は新型が12機にザクが2機！ 現在交戦状態にあると」

と、報告を受けたオペレーターはワツケインの問いに答え、それにワツケインは苛立たしげに唇を噛みしめる

現状ルナツーは見た目以上に深刻なダメージを受けていた。要塞の中枢たる司令室はその機能を回復させたが、衝撃により中央動力室で稼働する核融合炉の稼働に問題が発生しつつあり、いつ緊急停止させてもおかしくはない状態となっており、更に8つの宇宙船ドックが停泊していた艦艇ごと破壊され、スペースゲート4つが火災と衝撃による破壊により使用不能な状態だった

幸いなことにMSの開発、研究と生産のために整理された新規区画はほとんど影響を受けていなかったものの、要塞内の通路や居住区画の崩落などを含めればまだまだ把握ができていない状態にあった

「付近に敵艦は!？」

と、尋ねるも、そちらは反応なし。つまり今ルナツー周辺にいる敵は、ルナツーのすぐそばでパトロール艦と交戦する敵MSだけなのである

「いったいいつMSを発進させたんだ？ 最初突入してきた敵艦からMSらしきものが出撃したと言う報告は受けていない。仮に我々が捕捉できないほど長距離で発散させた場合も考えられるが、航続距離の観点からあまりに考え難い。しかしそれ以外に見つけられる方法がないはず」

と、思考しながらもパトロール艦を救うために、出動可能な第3戦隊に出撃を命じつつ、ワツケインは別のオペレーターに

「第1実験中隊は出撃できるか？」

と尋ねる。それにオペレーターは座ったままでワツケインの方に  
向き直り

「はい、空母「サラドガ」を含めて出撃自体は可能です」

と答える、それに頷いたワツケインは、続けてこう命令した

「ではサラドガに出航命令を、第4実験中隊はただちにパトロール艦  
来援に迎え！」

その命令はただちにオペレーターから宇宙船ドックの管理室とサ  
ラドガ双方に通達され、ドックに艦を固定させる分厚いガントリーク  
レーンが外れ、「ドレイク級MS空母」の3番艦「サラドガ」がゆっく  
りとルナツターの宇宙船ドックからスペースゲートへと進み出す

ドレイク級はネルソン級MS軽空母と並んで、ビンソン計画に並ん  
でルナツターで行われた従来艦のMS搭載能力追加を目的に行われた  
近代化改修案の一つである

形状は一言で言うともゼラン級を一回り巨大にした上で、左側に艦  
の全長の半分ほどもある二段構造の飛行甲板と、その下と艦体後部に  
艦載機の格納庫を増設した大型艦である

ネルソン級との違いはMSよりも従来のセイバーフィッシュなどの  
航空機の運用に主眼を置いている点にある。この理由は単純にM  
Sの生産にパイロットの養成が追いつかないため、優秀な戦闘機パイ  
ロットでMSへの適性の低いものは全て従来機で運用してもらおう  
と言う、連邦のあまりにも寒すぎる台所事情を反映したコンセプトと  
なっている（既存の航空機メーカーからの圧力もあつたことは明記す  
る）

基本的に二段ある飛行甲板のうち、上側は搭載予定のセイバー  
フィッシュやコアブスター、Gファイターの着艦とMSの発着用で  
あり、下の甲板は戦闘機専用の発艦用甲板となっている

基本的に全ての艦載機は艦内部の格納庫で管理されるが、出撃時に  
は専用のエレベーターによりMSは上部甲板に、艦載機は下部甲板に  
搬入、MSは自前のスラストで発艦するが戦闘機は下部甲板に搭載

された電磁カタパルト4基により戦闘速度にまで加速されたうえで発艦する

搭載機数はMSが12機、戦闘機はGファイター4機、コアブースター30機orセイバーフィッシュ30機

武装面に関してはMS搭載能力確保の為左舷の連装メガ粒子砲や対空砲の一部が撤去されたものの、飛行甲板とブリッジとの間に二段式で段差をつけた連想メガ粒子砲を二基四門搭載、更に甲板の両舷に対空砲とミサイル発射機を設置し、格納庫の船底部には連想メガ粒子砲が二基四門搭載され、こちらは360度稼働可能となっている

以上がドレイク級MS空母の全容である。この艦はビンソン計画決定に伴いルナツーに停泊していたマゼラン級を回収されて建造された艦艇であり、本来ならば防空を担うネルソン級MS軽空母2隻を入れた艦隊での運用を予定していたのだが工期の遅れによりまだ本艦しか改修が終了していないうえ、配備計画の遅れからまだMS12機しか配備できていないと充足率も足りてはいなかった

「全艦載機発艦開始！」

ルナツーのスペースゲートを出るなり艦首を上げつつ面舵を取り、ルナツーの上を通る形で反対側の戦場に向かおうとしているドレイク級の艦橋で、艦長となるエイパー・シナプス少佐は即座に艦載機の発艦を命じる。そしてドレイク級の甲板から即座に艦載機が飛び立ち、パトロール間の援護に向かう

「時間をかけるな！ 一気に沈めろッ!!」

対艦用に出力を最大にまで引き上げたビームライフルの砲口から限界まで縮退されたメガ粒子の光を見せる中、そう命令を下す私に、パトロール間へ肉薄する部下たちが威勢よく応える。戦闘開始から3分が経過し、既に4隻のサラミス級が撃沈されていた

そして私が両手に構えたビームライフルから放たれた極太の緑の光が放たれ、それはサラミスの艦首ミサイル発射管から艦尾までを貫き。文字通り串刺しにされたと言っているダメージを受けたサラミスは艦の中央部が内側から膨張し始め、最後には粉々に爆散する。こ

れで残りは僅か2隻。どちらも弾の節約のためにヒートサーベルのみとは言え12機のリック・ドムに群がられ、最早沈むのは時間の問題となっていた

「とにかく耐えろ！　ここで死ぬことは決して無駄死になどではないぞ!？」

それでも彼らの戦意が消え去ることはなかった。自分たちのルナツ<sup>家</sup>を守るために、自分たちの命で稼いだこの時間が必ず役に立つと信じて彼らは目の前の死に争い続けた

「…ちっ、時間をかけ過ぎたな…!」

強制排熱機構が作動し、空間が歪んで見えてしまうほどに大量の熱を排出させながらビームライフルのチャージを始める。もう3分もこうして戦闘を続けている。これではどれほどの混乱に見舞われていようとも要塞側が気づかないわけがない

「現時刻を持って作戦を中止する！　リーンツ!」

私は部下にそう宣言しながらチャージを終えたビームライフルを放ってまた一隻のサラミス級の上部をブリッジの大部分ごと抉り取るように打ち抜き撃沈させる

「は、はい!」

と、サラミス級のブリッジにヒートサーベルを差し込んだ一機のリック・ドムが私の方に振り返り、女性の声で返事が返ってくる。それに続けて私は

「モジュールの使用を許可する！　陸戦隊に撤収命令!」

と命令すると、リーンはすぐさま答え、リック・ドムの頭部左側面に増設された通信用モジュールのアンテナが伸びる

「少佐！　あれ…!？」

そのタイミングで別の部下が現れた何かに対してひどく驚いた声で私を呼ぶ。それに部下が期待で指さした方向である上を見た瞬間、私に向かって3本のピンクの光が放たれた

「っ!？」

咄嗟にマツナガのザクの腕を取ると、足場になっていたサラミス

蹴ってその場から飛び退く。すると足場になっていたサラミスにピンのクノ：メガ粒子の光が突き刺さり、真っ赤に赤熱化した装甲が内側から膨張するようにして爆発する

「くそっ！ まさかつ!？」

爆風に煽られる中、マツナガのザクを破片などから庇う中、さらに複数の光：おそらくは私が使うのと同じビーム兵器による攻撃が部下たちを襲う

「くそっ!？ 各機散開!!」

頭を抑えられたままでは此方が不利になると判断した私は素早く命令をくだす。それに部下たちはサラミスの残骸を盾にするようにして散開し始め、私はそれを援護しようとビームライフルを構え、そこで漸く敵の姿を捉える事ができた

赤と白のカラーリングにバイクヘルメットのようなバイザーに赤色のシールドを左手に、右手にビームスプレーガンを持った人型兵器：IFF上では連邦：つまり敵の識別となっているそれは、間違いなく今作戦の目標である連邦制MS：この時はまだ我々は知らないが「GM」と呼ばれるMSである

「もう好きかってはさせないよー!」

そう私に向かつて叫んだのは第4実験中隊第2小隊の小隊長を務めるライラ・ミラ・ライラ少尉である。彼女は私に対して手に持つビームスプレーガンを放ち、それを私はマツナガのザクを小脇に抱えて左に飛んで攻撃を回避しつつ、反撃とばかりにチャージを終えたばかりのビームライフルを放つ

「なに?！」

MSで携行するにはあまりにも過剰な火力に驚きながらも、素早く機体を操作し射線から回避するライラ。しかし彼女の部下は判断が遅れてしまい。至近距離を通過したビームの余波で左腕を肩どころか上半身の左半分まで溶かさされ、撃破されてしまう

「くそ!？ もう実戦配備されているとは…!？」

強制廃熱機構が作動したのを横目で確認しながら、目盛りを操作してビームライフルの出力を通常使用に変更しつつ、私は想定外の事態

に思わず悪態を吐きながらGMを睨みつける。まさか連邦が実戦に耐えうるMSを戦線に投入したと言うのは有名な話だが、まさか開戦から一年と経たずにザクと同じ主力量産機を投入して来るとは。連邦の国力はやはり無尽蔵である

「なんて考えてる場合じゃないな…!?!」

と、場違いな思考を切り捨てるためにそう吐き捨てる、私は上方から次々と強襲を仕掛けて来るGMを狙って方手持ちのままビームライフルを立て続けに放つ。放たれたビームは対艦用の最大出力に比べれもはるかに細いが、まるでセミオートのアサルトライフルのように連射することができた。が、そのビームがGM達に命中することはすべてすべて回避されてしまう

「上手いっ!?!」

直撃させるつもりは弾が殆ど命中しなかった事実には素直な賞賛と驚きの声を上げる私のザクIIの頭を数発のビームが通過し、うち一発が左側面を掠める

「おっと!?!」

慌ててスラスターを起動的を絞らせないよう機体を高速かつジグザグに移動しつつ、反撃のビームライフルを放つ

「ち?!」

放たれた反撃のビームをライラもまたシールドを構えたまま私の機動に合わせてるように、上からそれを覆いかぶさることを意識して頭上を抑えたまま私を追いかける

「良い判断だけど…!」

私は劣勢を楽しむように笑うとビームライフルをライラのGMへと向け3度放つ、それをライラはシールドを構えたままバーニアを噴射して右に飛び退くように回避すると、反撃とばかりにビームスプレーガンを放つが、私は射線とロックオン警告から狙いを正確に読み取り、身を振ると言う必要最小限の動きで攻撃を回避すると、そのまま機体を一回転させ、再びライラの方へと向き直ってビームライフルを放つ

「なにっ!?!」

軽業のような身のこなしをMSでやってのけた上に、殆ど姿勢を整え射撃するために標準を定める時間も取らずに正確な射撃する目の前の敵に対し、ライラは思わず驚愕の声を上げ、何とか回避できるがシールドの一部に命中、融解したシールドは粉々に吹き飛び、その衝撃に期待が持っていかれてバランスを崩す

「そんなんっ!？」

思わず情けない声を上げてしまう。実力が明らかにかけ離れていた。こちらが扱うあらゆる技術を、目の前の敵は見戯だと言わんばかりにあっさりと凌駕し、自分達こそがMS乗りだと言わんばかりにこちらを圧倒する目の前の敵に対し戦慄するばかりのライラは、しかしそこで戦意を失うほど軟弱な女では無かった

「トドメだー!」

バランスを崩したGMのコクピットを狙って2度放たれたビームを、ライラは一発目を無理やり機体を捻りながら一回転させて回避させ、そのまま上を飛び越えるように2発目を避けて見せた

「なんと!？」

まさかバーニアなどの推進機関だけでなく、人体と全く同じ構造をしたMSの特性を活かした回避法を取れるとは思っていなかっただけに、私から喜色を含んだ驚愕の声があがる。が、それをそのまま黙ってみているほど私は優しい訳ではなく、回避した直後、回転した機体を制動させる際に発生するGにより一瞬の無防備になる瞬間を狙おうとするが、引き金を引くよりも速く、私は突然自分の左上方からの新たな敵反応に対応せざるおえなかった

「くそ!? 何だ…!」

ライラの乗るGMがまだ態勢を立て直せていない、そのわずかな隙に第1実験中隊と交戦を続ける部下たちの様子を見つつ新たな敵反応の正体を確認する

「母艦だけで来るのか!？」

左方向から確認したのは第1実験中隊を出撃させたエイパー・シナプス少佐のドレイク級であり、私は周囲に他の艦艇が一切存在しない事、そしてドレイク級のマゼランとはかけ離れたその艦体からそう判

断する。そしてそれと同時に私はここで速やかに乗艦を沈めなければとんでもない事態になることを容易に理解してしまった

艦隊からの防空支援に晒されながらのMS戦などどう考えてもこちらは不利である。現状のキルレシオは3―1でこちらが優勢だが、そんなものは直ぐにひっくり返されてしまう

「全砲門撃ち方初め！ 艦載機を支援しつつ防衛線を構築し、敵をルナツーから押し出すんだ！」

苦戦するMS隊の援護の為に、乗艦が撃沈されるリスクを顧みず戦場に突入したシナプスの命令に従い、ハリネズミ。とも称されるドレイク級の豊富な対空設備が唸りを上げ、戦艦の名に恥じぬ巨砲が轟音を上げる

「全機回避だッ!?!」

咄嗟に無線でそう力の限り叫びながら秋非軌道を取りつつ対艦用に出力を上げようとする私に、態勢を整えたライラのGMが迫る

「あんたの相手は私だよ！ 一つ目!!」

と、そう叫ぶライラの形相はまさに必死の一言に尽きるが、その血気迫る気迫が私にプレッシャーとなって襲い掛かる

「くそ!?! 今お前なんか構ってる暇はないんだよ!?!」

サラドガの艦砲支援により一気に劣勢となった部下たちを見ながらそう叫ぶと、私はマツナガのザクを抱えたままビームライフルを構えると、拡散モードに切り替えると同時に補助も含めて全スラストを起動、爆発的な推力に任せてライラへと呐喊する

「くっ、くっ正気か!?!」

自殺まがいの特攻を始めた私に恐怖を感じながら、ビームスプレীগンのトリガーを引きまくる、砲口から連続して放たれるビームは、しかしそのどれもが私に抱えられたマツナガのザクを含めてほとんど当たらない

「年季の違いを見してやるよッ!」

被害を最小限に、挙動も最小限に、ただそれだけを意識しながら敵へと迫る。ライラから見れば抱えた仲間の命すらも勘定から省いた文字通り必死の特攻をしかける私に、有利な状況にあるはずのライラ



の方が追い詰められていく

「くそー。くそっ!？」

なぜ当たらない!? 心の中でそう叫びながらビームスプレーガン  
を乱射するライラだったが、奇跡的に最後の1発が胴体の動力パイプ  
を焼き裂く

「やったー!」

それにライラが喜んだ直後、彼女の10m前方にまで距離を詰めた  
私は、ビームライフルの砲口をGMのコクピットへと向ける

「っ!？」

自分のミスに気づいた彼女の口から声にならない悲鳴が上がる

「取ったー!」

それに対し、私は勝利を確信してそう叫ぶとビームライフルのトリ  
ガーを引く。そしてビームライフルの砲口から50個の光弾が一斉  
に拡散してライラの乗るGMを粉々に粉碎した、筈だった

「なにっ!？」

予想外の結果に驚愕の声を上げる。私の視線の先にあるモニター  
上には人間で言えば鎖骨のあたりから上と肩が消滅しているものの、  
コクピットブロックのある動体は装甲表面が焼けた跡しが残ってい  
ないGMがいた

「何故!?… まだパワーダウンするような稼働時間じゃ…!」

あり得ない事態にその声を荒げながらも、私はライラの乗るGMを  
無力化し、フリーになった以上は部下のためにも母艦を撃破しなけれ  
ばならないと、とにかくサラドガに向かって飛びながら原因を探そう  
と機体をチェックする

「はっ!？」

そして原因をついに突き止める。それは胴体部の動力パイプが切  
断されたことによる出力不足にあった。それを突き止めた私の思考  
に、絶望の二文字がよぎる。と言うのも高機動型ザクII P型はMS  
―11に使用される高出力ジェネレーターによりビーム兵器の運用  
を可能にしているのだが、実はこれ単体だとビーム兵器を運用するの  
に必要な電力を安定して確保できないとか言う本末転倒レベルの欠

陥があり、これを補うために外側に露出された動力パイプをサブジェネレーターとして使用し、何とか安定してビーム兵器を運用可能にしていたのである

「こ、これじゃ……!」

エネルギーゲインを見れば規定値の6割程度の出力鹿表示されておらず、ビームライフルの出力を最低にしても射撃できるか怪しい状態になっていた

「くそ…!? だとしても…!」

何もしない訳にはいかない、そう続けた私はマツナガのザクを抱えたままサラドガへ突撃する

「10時の方向よりMS接近!」

それを当然ながらサラドガは補足し、それをオペレーターがシナプスに報告する

「何ッ!? すぐに迎撃しろ! 主砲はこのままMS隊の援護だ!」

報告を受けたシナプスは即座に迎撃を命じ、主砲を除いたおおよそ全ての対空火器が私一人を狙って弾幕を形成する

「だとしてもおおお…!!」

最早変えることを気にする余裕などは存在しない。シーマから預かった部下を一人でも多く生きて返すためにペダルを踏み抜くつもりで強く踏みしめ、最高速度にまで加速しつつ最低出力に落としたビームライフルを連射する。放たれたビームは出力不足で最初の方で放った4発が有効だとして3発が艦体中央部上面に3発、うち1発が主砲に命中して大爆発を起こし、残る1発が甲板に直撃するも爆発を起こすことは無く、残りのビームは途中で消えるか艦の装甲を焦がす程度の戦果しか挙げられない

「くっそおおおおお!」

機体を不規則に左右に動かしながら機体自体も回転させたり捻ることで的を絞らせないようにしながら、私はそれによって自分の身に襲いかかるGに軋み上がる全身があげた悲鳴をかき消さんと叫びながらも、ペダルを踏みしめる足力だけは決して弱めることなく、最高速度を維持したまま艦底部に潜り込み、そこから大きく左に旋回し

て上昇軌道を取ると、そのままビームライフルを構えて一発。放たれたビームは旋回した直後のバランスの取れていない状態で、Gの影響も相まり狙ったメインエンジンではなく、ずれて隣にある左舷のサブエンジンを撃ち抜く

「ぐううおおおおおおおおおおおおおおお!!」

狙いを外した悔しさと怒り、そして襲い掛かるGの圧力に抗う決意を込めた雄たけびを上げながらサラドガに迫る。サラドガの艦尾からは決して小さくない規模の爆発が起こるが、その程度ではマゼラン級を改修して生み出されたサラドガは止まらない。既に部下たちは12機から7機にまで減らされ、残ったGM5機と死闘を繰り広げているが、継続してサラドガが行う艦砲支援は確実に部下たちの体力と精神を消耗させていた

「とつとと落ちろおおおおおおお!!」

そう叫びながらビームライフルを2発。放ったそれは艦底部に直撃するも出力不足で装甲を融解させるも、内部にはほとんどダメージを与えないことはできない

「チ!?!」

有効打を与えられない苛立ちに顔が歪む。状況は益々不利になりつつあり、残った部下たちの中にはすでに射撃武装が尽きて近接で応戦しているものもあり、何時新たな被撃墜が起きても何らおかしくない状況である

「くそつたれ…!」

いら立ちをぶつけるように弾幕をかいくぐりながらビームライフルを撃つも、放たれたビームは艦体の強固な装甲を貫けても、そこではほとんどすべてのエネルギーを消費し、内部にまで影響を与えられない。それが益々私の焦燥を駆り立てる

「こうなつたら…!?!」

最悪マツナガを一度捨て、全力でブリッジを叩いて敵艦を沈めるかどうかを真剣に悩み始めた、まさにその時である

「お願い、ビットー!」

と、通信などではなく直接脳内に良く聞いた少女の声が聞こえた直後、部下達と交戦していたGMが突如として爆散する

「何だっ!？」

突然の援護、そう形容していいかは不明だが、突如として部下たちを救ってくれた謎の攻撃に私の動きが止まった、まさにその瞬間にルナツーから放たれた2発のビームがサラドガのエンジンを撃ち抜く。その攻撃はサラドガを航行不能に追い込み、爆発の衝撃から間の姿勢を崩したサラドガは完全に戦闘不能になる

「ッ!? …まさか?」

突如としてサラドガを襲った攻撃。それに心当たりのあつた私は、機体を込めてルナツーの方を見ながらそう叫ぶ。するとルナツーのスペースゲートから現れた黒塗りのランチ4機と、こちらに手を振るGMが2機。間違いなくルナツーに突入した陸戦隊である

「…よしっ! よくやったぞ!!」

思わず手放しに陸戦隊の戦果を褒め称える私は、ルナツーから追加の敵部隊が現れる前に撤退を命令し、我々を迎えに全速力でルナツーの警戒線を突破したりリー・マルレーンに飛び乗り、何とか作戦を達成したのだった

ジオン海兵隊と私たちの活躍により、ルナツーの要塞としての機能は短い期間で修復可能なレベルではあるものの重大な損害を負い。更に量産化された連邦製MSの存在を知られたどころか、その完成機を敵に奪われると言う戦略的に見れば致命的な失態を犯してしまう

とは言え、大局がこの程度の事で揺らぐわけもなく。精々が星1号作戦に修正可能なレベルの問題を生じさせた程度であり、史実の流れのままに、オデッサは陥落することとなった

## 一年戦争編

### 第1話 再会

ルナツーに対する威力偵察及びMS奪取作戦を成功させてから1週間後、私はソロモンからジオン本国に帰還していた。その目的は作戦の成功を祝う記念式典に出席し、その足で懐かしの古巣であるツイマッド社のある施設に顔を出そうと自動運転車に乗っていた。理由は分からないがわざわざ軍を通して名指しの指名をされては行かない訳にはいかないので、あまり気乗りはしないがこうして自動車に揺られていく訳である

「…はあ」

今日の式典のことを思い出し、私は何度目になるか分からないため息を吐いた。ズムシティに置かれた政治の中心たる国会議事堂とデキン公王の御所を兼ねる趣味の悪い建物の前にある、独立記念公園で行われた式典は、国内外に大々的に放送せれるほどに大規模な式典となつてしまつていた

式典会場には動員をかけたのか、それとも自然に集まつたのかは定かではないが万を超える群衆が集まり、歓声と共に俺を褒め称える。会場には勲章を授与する公王の他に所属する宇宙攻撃軍のトップであるドズル閣下や高級将校数人が出席していた

「……………」

私は式典用の儀礼服のマントの重たさに酷い煩わしさを感じながらも、事前のリハの通り、ジオン軍人らしく堂々とした歩みで公王の待つ式典会場は向かうホワイトカーペットの上を進む

「はあ……」

あの何とも気持ちの悪い空間で過ごした時間は本当に不愉快だった。その時間で溜まりに溜まった胸の詰まりを吐き出すようにため息をついた

持つて生まれた性分としては見せ物は好きではない、だがそれ以上に私が解せないのは階級も上であり、そして作戦指揮官でもあるシー

マ中佐を始めとしたジオン海兵隊が初めからいない扱いになっていたのである

「何でそんなふざけたことがまかり通るんですか!？」

と、ズムシテイについた時、親衛隊の隊長で今回の式典の責任者になったデラーズ大佐にブチギレたことを思い出す

「華やかな式典の場に彼女たちのように非合法的な活動を行なってきた部隊を出すわけにはいかん」

の一点張りで私だけが参加となってしまうた。こんなあんまりな結果を甘んじて受け入れるほど私はできた人間などではないのでドズル閣下に直訴しに行ったものの

「俺もお前と同じで、今回の決定には納得などいつとらん。…だがアニキの…総帥の親衛隊長が言う事はもつともだ。元は違うとはいえ、特殊部隊のような運用をされている現在の海兵隊を、今更メデアに晒すことは出来ん。……すまないが今回はお前の味方をしてやることは出来ん」

と、渋顔のまま目をつぶりそう答えたドズルに対し、私は海兵隊のトップであるキシリアに対する嫌悪、そして同じ友軍であるはずの海兵隊を蔑ろにせざるをえない現実に対する怒りを懸命に堪えようと歯茎まで剥き出しになるほど力を込めて奥歯を噛みしめながら、絞り出すように答えた

「わ、わかり…ました…」

無礼なことは百も承知だが、このままではドズル閣下を非難してしまいかねないと判断した私は、この場を離れようと考え

「本日はお時間を頂きありがとうございます…式典の準備のために今日は…」

退室します、と続けようとした私の言葉を待て、とドズルは左手を上げて止めると、そのままこう切り出した

「…早とちりするな。式典自体に出席させることはできないが、休暇や昇進、昇給に新型MSの優先配備など俺が出来る限りのことはするつもりだ。無論英雄である貴様にも、その名前を使って海兵隊の名誉回復に努めてもらおうつもりだったのだが…その調子ならやってくれ

「そうだな」

と、額に汗を浮かべ、少し疲れた表情でそう言ったドズルに対し、私は子供のような態度をころりと変え、笑顔になると背筋を伸ばし、敬礼と共にこう答えた

「そう言う事ならば全身全霊全力で閣下と海兵隊のために働かせて頂きます!! 先ほどは無礼を働いてしまい申し訳ありませんでした!」

「お、おお…:そうか。ならばよろしく頼むぞ」

そのあまりにも素早い掌の返し様にドンビキしながらもそうドズルも答え。この日の面会はこれで終了となった

「モクテキチニトウチャクシマシタ」

式典やらなにやら、本国に来てからの憂鬱な記憶を思い出しながら車から降りる。最早懐かしさすらも感じるツイマッド社所有の実験場に来ていた

実験場はラボやMSの小規模組み立てラインとその資材保管庫、MSや車両の保管庫を一体化させた大きな建物を実験場の東側に設置し、残りを全てMSの試験運用の為に演習場として確保しており、実験場の中心には評価と監視の為に大きな管制塔が設置されている。私は少し薄れた記憶を頼りに、実験場内のMS格納庫に向かう

「あ! 来た来た、お〜い!」

格納庫の手前まで来た私に、格納庫のMSや車両用の出入り口となる巨大な鉄扉の中に作られた、人間一人が出入りできる狭さの出入り口の前に立つ、黄蘗色のセーターの上に社員証付きの白衣を纏い、下はジーンズにシューズと言った出で立ちの、丸眼鏡に天然のくせ毛をニット帽で隠した童顔の女性が私に手を振りかけて来る

「お? お〜!」

始めは遠くて少しわかりにくかったが、その女性の顔に見覚えがあった私は、その正体に気づくや手を振り返しながら女性の元に駆け寄る

「お久しぶりです少尉! あ、今は少佐か…」

と、元気のいい笑顔で俺を出迎えてくれたのはMSの基礎フレーム

の研究部門に所属している「エリー・ジェニー」だ。彼女は直接的なかわりは薄いですが、ツダ開発の為の意見交換会などで何度かあったり、開発チームに協力したりしていた、半分チームメイトみたいな人だった

「久しぶりだねジェニー。相変わらず元気そうだ」

と、私は素直に再会を喜ぶ。

ツダのテストパイロット時代

あの頃は思い出したくも無い、

と思うと同時に懐かしいと思ってしまう記憶でもあるだけに、100%再会できたことが嬉しいとは思えないが、私は精一杯の笑顔を彼女に見せる

「はい！ 少佐のご活躍はテレビなどで拝見しました！ そんな少佐に、今日は最高のプレゼントがあるんですよ！」

ささ、入って下さい！ と後ろに振り返り、出入り口を開けながらそう言った彼女のせつかちさに

「変わらないな…」

と、昔と変わらない彼女の姿に安心感を感じながら微笑むと、私は中から手招きする彼女に

「すぐ行くよ」

と応えると、彼女の開けた出入り口を通って格納庫の中に入る。格納庫の中は空調がちゃんと機能していて快適で、証明もしっかりしているのが格納庫の中を隅々まで見渡すことが出来た

「まったく、そんなに見せたいものっていった…い…」

と、エニーに対してそう話しかけていた私は、格納庫の奥に安置された機体が目に入ると驚きの余り絶句してその場に立ち尽くしてしまふ

私の目の前にあるその機体の名前を、その姿を忘れたことは一度としてない。軽量化と運動性強化のために極限までウェイトを削られ、機体フレームを剥き出しにしたかのような特徴的な青色のボディに、ザクよりもシンプルでスリムな頭部から伸びるブレードアンテナ

「ツダ…」

思わず機体の名前を呼んでしまう。かつてのツイマッドへの出向時代、俺がテストパイロットをしていたMS、EMS-04 「ツダ」



だ

「宇宙軍の次世代主力MSとして、十一月を目処に量産化に向けた準備が始まってますよ?」

と、私のなぜツダがここにあるのか、その疑問に応えるようにエニーが答える。それに私は思わず彼女の方に振り返る。その顔は突然の衝撃的な再会に、さらにたたみかけるように追加された衝撃により、酷く歪んでいた。その顔は喜びよりも、困惑の色の方が近い

「その通り、漸くあの時の判断が間違いであったと証明されたのだよ、少佐」

そんな私に、ツダの方からそう声をかけられる。反射的に前を向けば

「久しぶりだな少佐」

そこに立っていたのはツダ開発チームのテストパイロットのリーダーを務める「ジャン・リュック・デュバル」大尉が立っていた

「た、大尉…」

もう2度と会えないと思っていた男の登場に、私は反射的に彼に向けていた顔を僅かに逸らす。それをみたエニーはその光景を見たことが苦痛だと言うように悲しげな表情を浮かべるが、デュバルは顔色は戦えない平静のまま

「お前をここに呼んだのは私だ」

と私に話しかける。それに信じられないと目を見開きながらデュバルを見た私に、続けて少佐は

「一度お前とはちゃんと話をしなければならぬと思っていた。付き合っては貰えないか?」

と、そう俺の目を見ながら、圧力とは違う、決意を持った人間が持つ特有の…例えるならオーラののようなものに呑まれた私は、首を縦に振ることしかできなかつた

ツイマッド社の実験場からほど近い箇所にある街、グローブにある、もはや馴染みではなくなった。しかしテストパイロット時代、馴染みの店として通った寂れたバーのカウンターに、デュバル少佐と2人で並ぶ

「…」

「…」

互いに無言のまま、私はグラスに視線を落としたままその縁を右手の指でなぞり、デュバルは右手に持ったグラスに少し口をつけ、そしてため息かどうかも分からない息を吐く。そうして互いに話すことも無く無言のまま10分が過ぎた頃だろう

「…もう、4年は前のことかな？　君が我々のもとを去り、原隊に復帰したのは」

と、そう話を切り出す。それに私はなぞっていた手をピタリと止める

「…あれから随分と時間が経ってしまった。風のうわさで君がエースとしてザクに乗り、活躍していると言う話を聞いた時は、正直落胆の想いが強かった」

落胆の言葉にびくりと肩を震わせる私に、早とちりはするな、とデュバルは少し笑顔でそう言った後、残っていたグラスの中身を飲み干し、カウンターのの上にゆっくりと置く

「だが、君が生きていてくれたことが何よりも嬉しかった。あの日、君と大喧嘩した後、私は君にずっとあの日のことを謝れずにいたから」

と、店主の手により新しく酒を注がれたグラスを見つめながら笑うその顔には、後悔と悲しみを抱えた影があった。そして私はあの日のことを謝ろうと思っていた、そうともとれるデュバルの言葉に思わず彼の方を見る。その表情は明らかに驚きのものだったが、そこにはデュバルに対する悔恨で見にくく歪んでいた

「チガウ！　あれは俺が悪いんですッ！　俺が…!!」

と、デュバルの会話を遮り、場所も憚らず声を荒げた俺に、デュバルではなくバーの店主が声をかけた

「お客様」

物腰は柔らかく、相手を思いやり、引き立てようと言う接客業に携わる者の見本のような綺麗な……しかしそこにはまるで氷で造られた短剣で背中をなぞられているかのような、言葉に出来ないがまさに言外の圧とでもいうべきものを感じた私は、あれ程まで高ぶっていた怒りの炎が一瞬で覚めて行くのを感じながら、言葉を失ってしまふ

「お客様とそちらのお客様との間に、何があつたのかは存じません。存じませんが、お客様が思う譲れない想うがあるように、そちらのお客様の中にも譲れないものがあるのではないのでしょうか？」

と、そう言われた私は返す言葉を出せなかつた。恐らく先ほどの激しい感情を抱いていた時ならばあり得ないと一蹴したであろう意見は、しかし今の冷えきつた頭には理解が出来るものだった

「……ありがどうマスター。だがその続きはどうか私の口から言わせてはもらえないだろうか？」

と、席から立ち上がったデュバルがマスターにそう声をかける。それにゆつくりと頷いたマスターは頷くと、そのまま途中までしていた作業を再開し

「エイドリアン。すまなかつた……あの時の私は、上司としては最低の人間だった」

と、そう言つて深く頭を下げたデュバルに、かける言葉が見つからなかつた。貴方のせいではないと言おうとする感情を、マスターの言葉で違うと理解した今は言葉に出来ず。かといってそれを飲み込めるほど自分は、少なくとも私自身が思う限りは厚顔無恥になれなかつた

「自分も、自分も愚か者でした……。あの時……あの時自分はっ、自分は大尉の……デュバルさんの、皆の夢を馬鹿だつて貶して……そこから逃げ出したんです！　でも、頭がすつきりしてからはずっとその事を後悔して……ずっと……ずっと！　謝りたかつたんです!!　本当に申し訳ありませんでした！」

気がつけば涙を流していた。頭を下げたままのデュバルに私も深く頭を下げる。そのままお互い頭を下げたまま、私がすすり泣く泣き声以外音の無い時間が流れ

「…お二人とも、顔を上げて、お互いを許し合えば良いのではありませんか？ 傍から一部始終しか聞けておりませんが、どちらも過去の過ちをしつかりと反省しているようですし」

と、たまらず作業を中断したマスターが少し困ったように笑いながら助け舟を出す、その言葉を受けてデュバルはゆっくりと顔を上げると、私の肩を持って顔を上げさせよう言った

「…君を呼んだのは、こうやって君に謝罪したかった、と言うよりも、君にもう一度ツダに乗って欲しかったからなんだ」

と声をかける。それに涙を流したままえ？ と私は声を上げる

「テストパイロット時代。君がツダに向けていた情熱は私に並ぶほどのものだった。そんな君だからこそ、もう一度あの機体に乗って欲しかったんだ」

と、そう語るデュバルの言葉の中に込められた思いを受け取った私は、涙を拭うと

「…自分の夢を馬鹿だと貶して、皆さんを捨てて逃げた私を、皆さんは許して下さいるのですか？」

と、震える声でそうデュバルに尋ねる。その言葉の裏に「自分は許されても良いのか？」と言う字罰的な思いを込めていることを理解したデュバルは私の両肩を掴むと

「もう誰も君のことを恨んでなどいない。あの後社長から君と義娘さんの関係を全員聞いたからね」

と、そう言うといえ！ と声を荒げる私の、その声質と驚いた表情から嬉しいとはまた違った感情が込められていそうだが、私自身ではないデュバルとマスターはそれを理解できるわけもなく、デュバルは続けて

「これは我々開発チーム全員の、ツイマッド社の総意でもあるんだ。どうか受け取ってはくれないか？」

と私を見ながらそう言うってくるデュバルに、私はゆっくりと頷き

「お、お受けします…でも、私と彼女の話は…できれば、口外しないでほしいです…」

と、少しひきつった笑顔を浮かべながら、力の無い声でそう言った

## 第2話 過去を想う

「私の名前はジャン・リュック・デュバル、ジオン公国軍所属のMSパイロット教官と言う立場で、対地球連邦との戦争で主力を担うMSの選定試験に参加する企業の一つ、ツイマッド社のツダのテストパイロットチームを率いることになった男だ」

「私のチームには3人のテストパイロットが所属していた。皆優秀だったが、その中で当時最年少だったマシヤール・V・エイドリアンは齡17歳で高性能機であるはずのツダを己の肉体のように操る彼の姿に天賦の才を見た」

「私は自分自身もツダに搭乗しながら、彼を…マシヤールを育て上げるために私の持つ全ての技術と知識を注ぎ込み。彼はそれらをスポンジのように吸収することで急速に自分自身のポテンシャルを高めていった…」

「彼が居れば、必ずやツダは次期主力機として選ばれる。そう確信するだけの力を彼は持っていて、その彼の強さに、開発チームは応えることが出来ていた」

「き、機体が減速できない!? 誰か助けてくれ…! 助けてくれええええええええええ!!」

「その確信は、最悪の形で我々自身が裏切ってしまった。…主機の暴走による衝突事故。その原因は一定速度以上にまで加速した状態を、更に一定時間維持してしまうとリミッターが強制的に解除され、最高出力でエンジンがロックされてしまうと言うシステムエラーだった」

「しかし技術的には改善可能なレベルの問題点であり…我々はそれを改善した管制機によるサイドの評価試験を願い出た」

「…しかし軍は錬兵の観点からも、そしてコストパフォーマンスや発展性、拡張性など総合的な観点からツダではなくジオニック社のザク

Iに正式採用が決定。ツダは不合格の烙印を押されたものの「しかしその性能に見合う生産コストから鑑み、ツダの開発自体は継続することを許可する」との決定が下され、文字通り蜘蛛の糸のように細い命綱により、ツダは一命をとりとめることとなった」

「必ずやツダを世に送り出す」

「開発スタッフ全員が、その共通の目標の為に命すらも顧みない危険な実証実験を含めて、あらゆる手を尽くしてこのシステムエラーを改善しようとした」

「……だがどれだけの努力を積み重ねても臨んだ結果は得られなかった。まるで神がツダの誕生を望んでいないかのように解決の糸口は見つからず、一つ年を越える度に、予算は削られて行く。あの頃は先が一切見えない闇の中で光を求めてがむしやらに進むような、そんな未来の無い地獄の中で皆がもがいていた」

「原隊に復帰します」

「不採用の烙印を押されてから2年後の春。彼が：マシヤールが突如として私にそう言い放った」

何故だ!? どうして今になって…!!

「あの時は、あまりにも突然のことに平静さを失い声を荒げたのを憶えている。まだ20にもならない子供に何とも大人げない姿を見せたが、それほどまでに彼の言葉は、私の中では衝撃的だった」

「私は彼を必死で引き留めた。しかし彼は子供のように原隊に復帰するの一点張りで、最終的には親子ほど歳が離れた2人が口汚く他人を罵倒しあっていた」

「どれだけ調べても成果の一つもなく、予算も削られ、人もどんどん消えていく一方じゃないですか!? 僕はみなさんの荒唐無稽な夢にはもう付き合えない!」

わ、私たちの夢が出鱈目だというのか!? 撤回したまえ少尉ッ!!

事実でしょう!? みんなわかつてるじゃないですか!? 機体が空中分解してしまう改善不可能な欠陥機なんか採用されっこないって!!

ッ!? き、貴様あああ!?

「私は、私は反射的に彼の制服を掴んで持ち上げていた。騒ぎを聞きつけて開発スタッフの仲間たちが来てくれなければ殴っていたかもしれない…いや、きつと私は彼を殴っていただろう」

「この事件を最後に我々が対面することはなく、彼は原隊に復帰し、私はただの開発チームに残る。そして私は謝ることもできないまま、無慈悲にも四年の歳月が過ぎ、彼に謝罪できなかったと言う負い目は、私の心の片隅に決して抜けない棘として残り続けた」

「僕は、あの頃はまだ世界を知らない子供だった  
ればそう思う」

今振り返

「自分で言うのもあれだけど、僕は天才だった」

「MS適正試験では史上最年少で最高のS判定をもぎ取り、教官達を楽々倒して帰還する僕にみんなが期待してくれてた。だから僕もみんなの期待に応えられるように、慢心せずにどんなことでも学んで、MSパイロットとしての腕前をひたすらに磨き続けた」

「そしてツイマッドのテストパイロットに選ばれた時、僕の中にあつたのは喜びじゃなくて、それが当然なんだと言う自負だった。皆に期待され、それに応えた天才である自分ならば選ばれて当然のことなの

だと。：今思えば酷い天狗だったが、当時の私は自分では気づけない驕りを持っていた」

訓練学校では天才だと持て囃されていたそうだが、ここで認められなければツダを乗りこなして見せろッ！

「それをへし折ったのがデュバル大尉だった。初めてだった、MSでの模擬戦で勝てないと思ったのはあの人が初めてで。僕はMSパイロットになってから初めての挫折を味わった」

「でも僕はその挫折が凄く嬉しかった。今まで誰も並び立てなかった自分と言う存在を越えてくれたデュバル大尉は僕にとって超えるべき壁で、尊敬すべき目標で、そして僕にとって両親以外で初めて自分を止めてくれる大人だった」

「それがたまらなく嬉しくて大尉のもとで僕は出来る限りのことをした。ツダを自分のもう一つの肉体のように操るために寝る間も惜しんでMSについて、そしてツダについて学びながら、大尉を越えるためにツダを乗り回した。あの頃が人生で一番子供らしく遊べていたと思う。皆でツダを完成させるために、ただその為だけに進むことがたまらなく幸福だった」

「そんな幸福な時間は、ツダの正式採用と言う輝かしい栄光ではなく、重大な欠陥を晒し不採用という文句のつけようもない最悪な結末を迎えて終わってしまった」

「唯一の救い…とすらいえないが、希望となってくれたのはツダの性能を鑑みて開発凍結されなかった。それだけに縋って僕たちはツダを正式採用してもらえよう全力を尽くした」

「でもどんなに上手くツダを操ってもツダは応えてくれなかった。どれほど研究を繰り返し、データを積み上げそれを解析しても欠陥の原因を見つけ出すことは出来ないまま時間だけが浪費され、それに比例するよう開発チームの中に諦観の空気だけが重くのしかかっている…僕は人生で初めて生き地獄を味わった」

「そして2年目の春、連邦との開戦が現実味を帯びたことを証明するように、これまで我々に軍から支給されていた予算の大幅な削減が決定した。あの時の裏切られたかのような絶望と、それがどこかしょう



がない、と思えてしまう虚しさに僕は耐えられなかった」

「もう未来なんかはないはずなのに、皆で「必ずツダを完成させよう」なんて絵空事でお互いを励まし合う異常な世界に、僕は耐えられなかった」

「仲間を捨て、夢を捨て、師と呼んで教えを仰いだ大切な人すらも裏切り、僕は全てから目を背けて逃げ出した」

「……そんな私を、止めてくれる人はいなかった」

「……」

今の自分の心の内を表すかのように、コロニーの空は黒雲が覆う雨模様の中、私は少し薄暗い街の中を歩く

原隊に復帰した私を最初に待っていたのは、自分にとって憎むべき敵であったザクへの機首転換訓練だった

ツダに比べれば重りをつけられていると錯覚してしまうほどに動きが重く、加速も減速も遅いし小回りもきかない機体だが、ものの数カ月でツダレベルとはいかないが並のEース以上に扱えるようになった。その事で軍の人間たちからは「やはり天才だ」ともてはやされたが全てを裏切り、見捨てて逃げ出した僕がはそれを喜べるほど厚顔無恥にはなれなかった。

「……はあ……」

そうして原隊復帰から1年。気がつけば私は開戦直後から武功を稼ぎ、国の内外にその威容を誇るEースパイロットになるために専用機を与えられる選抜兵……とでもいふべき立場に押し上げられ、専用機として最新鋭のザクII C型を、私戦用にカスタマイズされたものを受領し、毎日それを乗り回して他の選抜兵……シヤア・アズナブルにブレ

ニフ・オグス、ジヨニー・ライデンやガイア、オルテガ、マツシユにグレニス・エスコット等々後の世に名だたるエースとして活躍する者たちとの模擬戦や仮想標的を利用し演習などをこなし、埋もれぬ戦績を叩き出した俺は、選抜兵以外からはすさまじい賞賛の嵐と羨望の眼差しを受け続けた

「今更何の価値があるんだよ…」

しかし向けられるすべてが無価値に感じてしまう。賞賛の嵐は逃げ出した自分を嘲笑う嘲笑に聞こえ、羨望の眼差しは仲間を見捨てた自分に対する軽蔑と侮蔑の視線に感じてしまう

「うっ…!？」

何もしていない頭にそのような考えが浮かんだ瞬間。体の奥からせりあがる熱さに咄嗟に傘を捨てて両手で口元を抑える

「うう…うああ…!?! うえ…!」

口元を教える両手が、いや全身が小刻みに震え出してしまい、立つことすらままならなくなってしまった私はその場に膝をつき、苦しげにうめきながら背を曲げる

「だ、大丈夫ですか…?」

明らかに只事ではない様子にすれ違った若い男性が私に声をかけてくる

「…!… うあああ…!?!」

それすらも自分を侮蔑する声に聞こえて仕方がない。見ればこの歩道の周りにいる、自分を見て立ち止まる、あるいはすれ違う全ての人々が自分を嘲笑っているように感じられた私は、その場に捨てた傘を拾う事すら忘れて、直ぐ近くの路地に足がもつれながらも駆け込む

「はあ…!… はあ…!! はあ…!!」

視界が歪む、息が苦しい、今すぐにでも吐き出したいくらいの吐き気と気分の悪さの影響からか体が重たく、足がもつれて上手く走れない

「嫌だ嫌だ嫌だ…! もうイヤだ…!!」

えづく口では碌に吐き出すことも出来ない弱音を心の中で吐き出しながら、私はただひたすら他人から逃れるために、当てもなく路地

の中を進んでいた

このままではMSには乗れなくなります

「クソ！ クソクソ!! 僕が何をしたって言うんだ:!?」

つい先日、等々医者から宣告されたその言葉に、自分なりにその原因を理解していながら、その原因がほかならぬ自分の選択の結果であるはずなのに。文字通り私は逃避するようにその言葉を紡ぐ。

「:…ッ！ く×そ×お×お×お×:…:」

自分が余りにも惨めで仕方が無くて、気付けば目から流れた涙が、絞り出すように呻いた口元を抑える両手を伝う

自分でもわかつている。帰って来てからの一年間、腕前は上達を続けていたが、精神や肉体はそれに反比例するように衰弱していた。そんな状態でパイロットが出来ていたのは、一重にMSの才能に他ならなかった。だがそれではもうカバーできないほどに、私の心身は最早限界と言うべきレベルにまでダメージを負いつつあった。だからこそ、あの医者は私にそう言い放ったのだ

「うつ!」

等々足がもつれて体勢を崩した私は前のめりに地面へと倒れ、私は受け身も取れずに強かに全身を強打する。そして起き上がろうと口から手を放し、何とか四つん這いの姿勢になった瞬間

「あつ…:うぐう…:うつ!」

こらえきれずに私は今日食べた全てのものを口から吐き出した。何度も何度も激しくせき込みながら、涙や鼻水、唾液と吐き出した吐しゃ物と胃液で顔をドロドロに汚しながら、それでもなお止まらずに吐き続ける

分かっているのだ、自分がダメなのは自分が一番よくわかっている。でも堪え切れるわけがない。僕にとって、私の全てはMSだ、私の人生の存在意義はMSに乗り、結果を示すことではない。そうその結果しかないのだ

「うげえええ！ あああああ!! あああああ!!」

もう吐けるものもないのに叫びながら搾りかすのような胃液を吐き出し、吐き出した吐瀉物の上で暴れ回り、のたうち回る。だがそれ

でも吐き気が治ることはなく、気分が良くなることもない。わかっているのだ、捨てればこれが消えるのだと、逃げ出したのだから最後までやり抜いてしまえば自分が死救んでしまわうことくらい

「ああああああ!! ぐああああああ!!」

叫ぶ心を止められない。止められるわけがない。捨てたくない、自分の唯一の誇りを、自分が捨てたはずの仲間たちと積み上げた自分の力を、自分の存在意義を捨てたくない。逆にそんなものを捨てたいなどと、願う愚か者が一体どこにいますかと言うのだ：そんな矛盾した思考と感情の狭間で足掻き苦しむその様子を、滑稽と言わずして何を嗤えるのか

「……………」

あれからどれほどの時間を浪費したのだろう。喉は潰れ、掠れうわずった呼吸音が時折聞こえるばかりのうつろな表情のまま、私は雨によって半固形のもの以外は洗い流された吐瀉物の上で、死んだように空を眺めていた

そんな時、ふと自分の頭上から視線のようなものを感じた私は、頭を上げてその視線の正体を探ろうと上を見上げる。見上げる際、頭の辺りから嫌な水音が聞こえたが冷え切った体ではほとんど何も感じないしそれに何か反応する余力はもう残ってはいなかった

「……………」

見れば、そこにはスペースコロニーに住んでいるとはとても思えない、ぐずぐずに汚れた少女が一人、壁にもたれるようにして膝を抱えていた。年は十代：にいるかどうかすら怪しい幼女と言っている子で、その垢にまみれ、肌も荒れて濃いクマを目の下に作った顔が私を見つめていた

少女の髪はまるで老婆のように真っ白で、ゴミやふけ、シラミなどが沸くその髪は明らかに手入れが長年されていないのだろう、服も長袖のワンピースのような薄くヒラヒラとした生地だが、その元の色が分からないほどにグジュグジュに汚れて変色し、一部は腐食しているのか赤黒いシミに緑を足したかのような色合いに変わり、傷だらけ赤まみれの足は靴などを履いていない素足であり、真っ黒に染まった足

底とボロボロにひび割れ、肥大化した爪と硬く硬化した指から、相当長い期間素足で移動していたのが容易に想像できた

まるで旧世紀のスラムとか言う極貧の人々が生活していた世界の住人のような、この宇宙世紀では絶滅したはずの人間が目の前にいると言う非現実的な光景は、しかし私にとっては何ら重要なものではなかった

「…き、きみ、わ…」

枯れ果てた耳触りの良くない声で、必死に目の前の少女何かを訴えようとする私に、口を開いてもいないのに彼女の声が聞こえて来る

「あなたは、わたしとおなじ」

その言葉に、私は溢れ出すようにため以下のように吐息混じりの声を出す

「わ、ほ、く、は…」

喋りたい。もつと彼女と喋りたいはずなのに、こんなにも自分の体は言うことを聞いてくれない、そのもどかしさがたまらなく嫌で、私は体を転がして仰向けからうつ伏せに体勢を変えると、震える手足で体を支えておぎあがろうともがく

「でも、あなたはもがいてる。どうしてあきらめようとしなの？」

表情は動かない、まるで彫刻のように微かな身じろぎ一つない少女は、口も開かず私に声を届ける。あまりにも異常な存在だが、私は彼女に何一つそう言った感想を抱かなかった

「お、な、し…き、い、み、も、っ」

そう、私は彼女に対してそれしか抱かなかった。自分という存在に、世界と言うものに絶望した目をしていて。違いがあるとすれば私は未練がましく足掻き、彼女はそれをやめている。ただそれだけなのだろう

「あなたは、えいどりあん？」

初めて、少女の首が微かに傾いた。それに私は、震える手で体を起こし、左足で大地を踏み締め、右手で大地を支え、左手を左足の膝にのせて呼吸を整えるようにして体勢を変えると

「そ、う、た、」

と答える。それに少女は再度こう問いかけた

「あなたは…えいどりあんは、わたしとなにがちがうの？」

容量など得ない抽象的な問いかけだ。しかし私は彼女の問いの意味を理解できた。理解できたからこそこう返した

「…ききみみの、しっらなないせいかいをみていたかから…」

そしてゆつくりと彼女に手を伸ばす、その伸ばした手を見て、初めて…少なくとも私が彼女に気づいてから初めて彼女の体が動き、彼女は、私の手を取った

この時私は誓ったのだ、何があろうとも、私は彼女の光になろうと、私にとっての大尉たちのように、光になろうと、私はその時つよくちかったのだ

これが、後の世に狭間の妖精と呼ばれることになる男の、本当の意味での始まりの邂逅となった

### 第3話 相棒と戦友と

ジオン本国の領域内を駆け巡る青い軌跡、それは間違いなくヅダであった。しかし通常のヅダとは違い、原形をその機体は原形をほぼ留めぬほどのカスタマイズが施されていた

全身に増加装甲を追加し、機体が見解は頭部以外原形をとどめていない特異な外見となったその機体は、連邦系MSに似たフロントスカートや特徴的な胸部の排熱口やコクピットハッチなどが胴体よりも少し前に盛り上がるような、連邦系MS特有の胴体構造に特徴的だったヅダの肩はゲルググのごとくとしたものでも、ザクのようなスパイクアーマーでもないスリムなボックス型に近い、肩の関節を装甲で挟むような特徴的な仕上がりで、四肢も追加のスラスタや増加装甲によりしっかりとフレームなどは保護されている。頭部はそのままに両側面に後付けでバルカン砲を後付けし、更に左側のバルカン砲には指揮官用のブレードアンテナの補助を目的に広域通信用の増幅モジュールを搭載して更に指揮能力を高めている

脚部はドムの脚部を参考に推進剤タンクを脚部の裏側に搭載し、それを増加装甲で覆った大型化した足は、一見すれば鳥のように細く、鉤爪のように細い3本の足の中心には補助用のスラスタを追加しており、脚部自体も増加装甲内の推進剤タンクからの燃料供給とスラスタのエンジンにより大部分が占められており、著しい耐久性の犠牲と引き換えに更なる加速力を得ている。後脚部の側面外側にはエンジンの排熱用ダクトがある

背部には新型の土星エンジンをメインスラスタに搭載しているが、メインスラスタを×の字に補助用のサブスラスタを搭載しているため背部ランドセルには燃料積載とサブジェネレーターの増設を目的にF91にも似た箱型に変化、大型化しており、ゲルググMやJで使用されるプロペラントタンク2基を前述の2機同様斜め下に延びる用に接続され、稼働時間を延長している。最後に機体カラーは本人の要望からミッドナイトブルーで全体統一しているが関節、足底から踵、つまさきにかけてと首などは黒味がかかった灰色で塗装され

ている

「……」

それを操るのは私……エイドリアンである。専用の対Gスーツにシートから遊園地のアトラクションにある安全バーのような体を固定させるために専用の保護板で胴体を固定させ、ザクなどは比喩物にならない、宇宙での高機動戦を想定しているリック・ドムですら歯牙にもかけない圧倒的な機動性に振り回されないよう全力を上げる

次世代コクピットのテストベットとして、戦闘機のキャノピーのようにならぬ上部が半円型になつていてうええ全てモニターに変更、計器類はその殆どをモニターに電子的に表記させるように変更されていた

そのまま飛び回ること約30分。全ての行程を終えた私は副官の待つパプア級補給艦に着艦。誘導員の指示に従って格納庫の奥まで歩くと、そこでそのまま機体を停止させる

「ふう……」

機体のシステムをロックすることなく、まだ少しぎこちない手つきで保護板のロックを解除し、手で上に上げれば後は勝手に動いてシートの裏側に戻ってくれる、それを確認してから肩を揉みつつ首を軽く回してほぐしながらコクピットハッチを開く。するとコクピット内のモニターの前半分が後ろ半分に重なるようにスライドして開き、そこから外開きに装甲の一部が開き、最後にハッチの2枚の鋼板が上下にスライドして開く

開くと待ち構えていた整備員が親指を立てて出迎えてくれたので、それに親指を立てた左手を突き出し応えようと、そのままコクピットから出て後のことを整備員に託しつつ、彼の敬礼を背にブリッジへと向かう

向かう間にシャワーと着替えを済ませ、ブリッジに着けばツイマツドから出向して来た30代前半の細身で長髪の男とデュバル少佐の2人と何やら話している副官が居た

「あら、もうお戻りになられたんですか？　もっとゆっくりでも全然良かったんですよ？」

と、私の登場に最初に気づいた副官が笑顔で出迎えてくれる。相変



わらず目が開いているのかいないのか良く分からん笑顔だ。それに私は右手を腰に当てて、いなすように腕を軽く振ると

「お客様をお待たせしているのにのんきにシャワーなんてできないよ」

と言いつつ、私は2人の方を見ると

「自分の初飛行はどうでしたか？」

と尋ねてみる。それに長髪の男が真っ先に答えた

「いやはやさすがはデュバル少佐のお弟子さんだ。素晴らしいデータが得れましたよ」

男のおだて用にデュバル少佐は少しバツが悪そうに苦笑いを浮かべる。私の場合は何とか普段通りに笑って受け流そうとするが、やはりバツが悪そうに表情に少し曇りが残る

「やれやれ…」

そんな二人の様子に瞬時にめんどくさい何かがあることを見抜いた副官は、内心そのため息交じりに吐き出すと

「司令官殿、新型について知見を見せ合うのは結構ですが、そろそろ帰港せねばならない時間ですよ」

と助け舟を出して流れを無理やり断ち切ると、私はそれに一瞬遅れて反応した

「も、もうそんな時間か?! これは大変だ! 少佐、ウォルター主任、申し訳ないがお話はまた今度に!」

と私が少し早口にそう言うと、細身の男は仕方ありませんね、と笑顔で答え新型機についての談義を必ずすることを約束させてきた。その時の圧があまりにも強烈に過ぎて首を縦に振る以外の選択肢が無かった事は明記しておく

「そ、そうだな…少佐、今週中に空いている日はないか? また君を誘いたいのだが…」

と、何とも普段の少佐らしくもない、少し遠慮がちなお誘いに、私は思わず苦笑しながら

「もちろん。明後日の夜なら朝まで行けますよ」

と応じる私に、デュバル少佐はいつもの彼らしくもない、少し弱気

だった彼の表情が安堵したような笑顔に変わり

「ありがとう。必ずその日にまた飲もう」

と、嬉しそうにそう言った少佐に、私も少し遠慮がちだが、楽しそうに笑顔で

「はい！ 私もその日が楽しみですよ」

と答え、その間副官は長髪の男の興味を引くために興味もないはずのヅダについて興味深気な振りをして尋ねながら

「全く…思春期の喧嘩したカップルかなんかですかアンタらは…」

と、内心二人の様子に呆れながらも、どこか達成感を持った笑みで彼は囮役を全うした

そしてここはサイド3で最も治安が悪いと呼ばれるコロニー「マハル」別名はスラム街と最早名前だけでどんな場所か丸わかりだが、今日はズムシテイに帰港した後、コロニー間の連絡用シャトルを使ってマハルに来た私は、待ち合わせの人物との待ち合わせの酒場に来ていた

「……」

ズムシテイやグローブでは見ることができない、見るからに素行の悪いゴロツキ達が肩を並べて大声で笑い、席の概念もなく店にいる人全員が仲間だ、とでも表すべき独特な喧騒の雰囲気の中、一角だけ、人もほぼおらず。喧騒とも無縁の場所、酒場最奥のカウンター席に座る一人の女性。その後ろ姿は間違いなくシーマだった

「シーマさん、おまたせしました」

と、使い古した古着のセーターとその下に見える長袖のシャツにジーンズといった出立ちの私が声をかけると、待っていたグラスをゆつくりとカウンターに置き

「…こんな場末の酒場によく来たね、少佐」

と、あまり歓迎していないかのような言葉遣いだが、その顔には呆れたような、しかしどこか嬉しそうな笑顔を浮かべたシーマが振り返ってそう言ってくれた。それに私は肩をすくめ

「場末だなんてとんでもない、立派な飲み屋ですよ」

と、返しながら席に座り、適当に酒とつまみをカウンターにいた店員に頼む、さらに店員は軽い会釈をしてから裏手に入る

「…本当に、約束を守ってくれるなんてね。あんた変わってるよ」

と、開口一番シーマがそう切り出す。それに私はなんのことやらわからず

「そんな大事な約束をしましたか？」

と、シーマの浮かべる喜んでいるとは思えないが。だからと言って私がこうしてきたことに不快感を示しているわけでもない、複雑な表情にそこまで大事な約束をしただろうか、と必死で記憶を思い起こす私の真剣な表情にシーマの表情が真顔に切り替わり

「ぷっ」

とシーマが嘖き出す、そして酒場の喧騒に負けなくらいの大声で笑い出した

「あくはっはっはっはっ！ こりや傑作だよ！ あんたはやっぱり大馬鹿ものさね！」

と、そう言って笑う彼女の様子に、私は訳も分からずいきなり笑われたので納得が当然ながらできず

「なっ!? なんなんですかシーマさん！ 人が頑張ってるって思い出すと苦労しているのに…!?!」

と抗議の声を上げる。見るからに怒っていますオーラ全開であるが、シーマはまるで子供を相手異にしているかのように余裕の態度のまま

「怒り方からしてあんたはバカだろう少佐殿？ 約束事を忘れたって本人の目の前で言ってるんだから」

と、言われてしまうとぐうの音も出ないため、私は肩を落として申し訳なさそうにごめんなさい、と謝り席に座る。するとそのタイミン

グで酒とつまみを持った店員が来るのでそれを受け取り、私は受け取ったそれをカウンターのの上に置く。その様子から流石にからかいが過ぎたかと判断したシーマは笑顔のままではあるが私にこう声をかけた

「ああ…そう子供みたいにすねないで送れよ少佐殿。約束つてのはこの酒場に来てくれたことだよ」

その言葉に私は思わずこう問い返してしまう

「意味が分かりませんよ…俺が飲みに誘ったのに、なんでそれを私の方から蹴るんですか…ふつう逆でしょ」

その言葉にシーマは少し悲し気な笑みを浮かべ、そして何か物思いにふけるように私から視線を逸らすと、カウンターを指でなぞり

「ほんと、あたしら相手に普通に接してくれるね、少佐殿は…」

と、そう私に行ったシーマに対し、私はイマイチ意味を察せられなかったが、何となく棘を込めていることだけは理解したのと

「階級で呼ぶのはやめて下さいよ。せめてマシヤールと呼んで下さい」

なんか他人行儀な感じに不快感を感じてそう要求する。それにシーマは、分かりましたよ、とため息交じりに言うと、その長髪を右手で軽く払うと

「…しかしマシヤールは本当に態度を変えないねえ、調子がくるって仕方がないよ」

と、グラスを持ち上げ、残るウイスキーが反射する光を観ながらそう話しかけてくるシーマに、私はつまみのジャーキーをかじると

「…初めて会った時にも似たようなことを言いましたが、僕は海兵隊を、指揮官であるシーマさんのことを尊敬しているし、信用もしています。だから今までシーマさんが出会った人たちのようなことをしたくない。戦友として、肩を並べて生きて帰れたことを喜び、分かち合いたいと思っているから変えないですよ」

と、素直な胸の内を明かす。言いながらも羞恥心で自分の顔が赤くなるのを感じながら、私はそれをごまかすためにジョッキになみなみと注がれたビールを豪快に呷る

「良いねえ…ちまちまとせせこましく飲むやつよりよっぽど気持ちがいい飲みっぷりだよ」

と、私が恥ずかしがっているのに気付いたのか、それとも言葉通り私の飲みっぷりを気に入ってくれたからなのかはわからないが笑顔でそう言ってくれたシーマは、店員を呼んで2杯目を求める

「…申し訳ありません」

酔いの勢いに任せて思っていたことを正直に伝える。回り始めた酔いの影響で思考が浮遊し始めるあの独特の感覚を憶えつつも、私の予想通り彼女は顔を顰めていた。しかし彼女は少し不機嫌そうだが、顰めていた顔をほぐすと正面を向き

「…やめてほしいね、酒の席でてめえの自己満足を出して来るの。あなたの性格なのはわかるが、酒が腐っちまうよ」

と、おそらく本心からそう言ってるのが良く分かる、少しのいら立ちを込めた言葉に、私は少しだけ浮遊感が消えたのを感じつつ

「…確かに、自己満足ですが、でもけじめをつけなきゃ道理に反すると思っただんです」

と、そう言った私にシーマはけつ、と露骨に機嫌悪そうに顔を顰めるとグラスの中身を飲み干す。すると店員がシーマの目の前に新しいウイスキーの入ったグラスを置く。それにシーマは眉間にしわを寄せており、私の発言による苛立ちや不愉快さがにじみ出てしまった結果なのだが、店員は涼し気にそれを受け流し、私の方を手で指す

「台無しにしたお詫びです」

とそう言って一杯分の代金をカウンターに置いた私に、シーマは特に何も言う事はなくただ横目でちらりと私を見た後、新しいグラスを手にとるとそれを飲み干し、決して乱雑ではないが、軽く音が出てしまう程度には力を込めてカウンターに空になったグラスを置くと

「はあ…一杯じゃ足りないよ。今日はあなたの奢りだよ」

と、そう言ったシーマの表情は変わることが無かったが、その言葉に私は嬉しそうに笑顔で頷く。それに毒気を抜かれたかのようにため息を吐くも、その表情はとても嬉しそうなものだった。それにホッと内心で胸をなでおろしつつ新しいジョッキを受け取る私に、新しく

頼んだビールエールの入ったグラスを持つと

「仕切り直しだ、今日はとことん飲むよ！」

と、彼女はそう言っただけで私にグラスを掲げ、それに私もスタウトビールの入ったジョッキを掲げ

「もちろん、限界までお付き合いしますよ！」

威勢よく笑顔で答え、そして酒場の喧騒の中に、子気味良い音が一度鳴り、しかしすぐに喧騒の中に？まれて消えて行った

それから5時間、お互いの身の上話から指揮下の部隊自慢に愚痴やらなにやらから上司の名指し批判と互いに羽目を外して言いたい放題。最低限周りへの配慮は出来ていたのがせめてもの救いではあるが口を滑らせるための酒の消費速度はほとんど落ちることなく、むしろ加速し続けた

「ぐにゃんにゃんみゆ……」

その結果がこのような大変ユニークな寝息を立てながらカウナーに沈む酒に？まれた私と、まだ意識をある程度思考や意識がクリアな、所謂酒に呑まれなかったシーマの2人が出来上がってしまったのである

「全く…本当に限界まで付き合うやつがあるかい……」

顔は紅潮しているものの、余裕のありそうな表情で呆れたように笑いながらそう私に話しかけるシーマ。それに対して私はわずかに身をよじる唸る程度の返ししか出来ない。こんな場末の酒場で酔いっぶれるなど身ぐるみ剥がれてそれを写真なり動画なりで撮影されて脅しのネタにゆすられ続けるぐらいはされるが、シーマと言うマハルでも勇名悪名共に轟く海兵隊指揮官の目があるおかげでそのようなアホをやらかす者はいないが、それでも様子をうかがういつものねっ

とりとした視線を感じてため息を吐いたシーマは、とりあえず私を起こそうと軽く肩をゆすり声をかけた

「おいこらマシヤール、こんなところで寝てたら食い物にされちまうよ?」

しかし帰って来るのは寢言で、起きる気配など微塵も感じない私の気持ちよさそうな寝顔に一発殴って起こしてやろうかと少し苛立った様子のシーマが握り拳を作った直後、私のズボンに差した携帯用端末が不意に鳴り出す

「? ああちようどいいね」

せつかくだからこいつの迎えに来てもらおう、そう思ったシーマは私のズボンから端末を取り出し、携帯用端末を操作し通信に出る

「あれ? その声はシーマ中佐じゃないですか? 少佐はいつたいうされたんですか?」

と、私の副官の声が通信から聞こえて来る。それにシーマはささつと説明すると、端末越しに副官の深いため息が聞こえて来る。声だけで相当苛立っているのが分かるほど露骨なもので、そのまま副官は少し申し訳なさそうな声でシーマにこう言った

「すいません中佐、今から迎えに行きますので少佐を宇宙港まで運んではいただけませんか? 港には私から連絡を入れておきますので」

それにまあ家まで送るよりはマシか、と判断したシーマは軽く息を吐いてから意識を切り替えると

「分かったよ、港の何処に持って行けばいいんだい?」

と尋ね、そのまま副官と待ち合わせ場所について幾つかの確認を行い、通話を終えたシーマは、気持ちよさそうに眠る私を起こそうと肩に手を振れ

「お兄さんは私が連れてくよ」

と、彼女に向かつてそう声がかけられる、それに触れようとした手をピタリと止めたシーマが声のする方を向くと、そこにはどうみても大人には見えない少女が立っていた

腰まで伸びるポニーテールに白と青みがかかった灰色のロングシャツワンピースに調整用のベルトなどが付いた黒いロングブーツを履

いた少女が、両手を腰に当ててシーマのことを見ていた

と言っても少女は縁まで黒いサングラスをかけており、どちらかといえど小顔で整った顔立ちながらそれは凛々しいと言うよりは可愛い、愛らしいと言うジャンルのものであり、サングラスに隠されているながらサラサラもアクセントに自らの可愛さを引き立てていた。例えるならば妖精のような魅力、と言うやつなのだろう

「あんたは？」

突然現れて、私を指してお兄さんと呼んだ少女に対し、警戒しながらそう尋ねつつ、何時でも私を庇えるよう席から立ち上がると一歩前に踏み出す

「そこで寝ている人の娘よ。迎えに来たの」

と、未だに潰れたまま寝息を立てる私の背中を右手で指さしながら言い放つ少女に、シーマはあまりのインパクトに

「は？ い、今なんていったんだいあんた？ こいつの…娘？」

と、とても信じられないと驚愕の表情を浮かべたまま、何度も何度も私の寝顔と少女の顔とを行ったり来たりするシーマの姿に面白そうにくすりと笑うと

「本当だよ？ 血は繋がってないけどね」

と、シーマの問いに答えると、少女は私の元へ歩き始め、それにシーマはまだ十分に信頼できている訳でも無いのに、何故か少女の私への接近を許してしまう。そして少女は私の元まで来ると、耳元に口を運び

「お兄さん、ほら起きて」

と、囁くように私に声をかける。すると今の今まで熟睡していたはずの私の方がピクリと震え

「んあ…」

と、寝起き特有の一体何を思っただのか良く分からない声と共に私が覚醒し、だるそうに体を起こし、それを少女が背中を両手で支えて席から倒れないようにしながら

「も、今日はハメは外さないように気をつけるんじゃないのかお兄さん？」



と、私を支えるのは楽ではないようで、少し辛そうに顔を歪めながら、おう私を咎める少女に、私はまだきちんと覚醒できてはいないよ  
うで、呂律が少し回っていない状態で少女に謝罪を入れる

「ごめんねえ〜：シーマしゃんと話しゆのがたやのしくうってえさ  
〜」

それに少女ははいはい、と少し呆れた、しかしそこに嫌いなどの悪  
感情の無い、むしろこうして私の世話をできることを喜んでいるかの  
ような笑顔で相槌を打つと

「ほら、お家に帰りましょう？ 自分の足で立てますか？」

と、そう尋ねながらそつと左肩に触れる。それに私は大丈夫だよ  
〜と、先ほどよりも幾分マシになった呂律でそう言っつて席から立ち  
上がろうとする私を、肩に手をまわさせて支えようとする少女

「ちよ、ちよつと待つとくれよ〜！」

このまま行かせるのはまずいとシーマが待ったをかけた

「あんたが本当にこいつの娘だとしても、あたしはこいつの部下から  
こいつを任されてるんだ。このままはいそうですかで見送る訳には  
いかないよ〜！」

その言葉に、それは困りましたね〜と右手で私の背を支えたまま左  
手で口元に触れると、シーマの方を向いて

「シーマさんも一緒に来ていただけますか？ その方が色々  
面倒を省けそうなので」

と、さも当然のように言い放つ少女の言葉に、信頼してよいのかど  
うか悩むシーマ

ここで視聴者諸君は察しがついているだろうが、マハルの場末の酒  
場に突然現れた見知らぬ少女など、本来であれば相手すらせずは無視  
するのが普通である。なぜならばこのマハルに置いて弱みを見せる  
ことは食い物にされると言う意味なのだから

にもかかわらず、シーマは少女の話に乗り、主導権を彼女に渡した  
まま私への少女からの接触すらも許してしまっている。明らかに許  
してはいけない状況にも関わらず。まるで何者かの操作が行われて  
いるかのよう、彼女の思考からそれとなく少女にとって不利な思考

が除外されているのである

「…変な真似したらただじゃ置かないよ」

と、凄みを効かせると着ている軍服のマントの下に隠した拳銃を、他の客には見えないように見せる。それを観た少女は凄みも聴かず、見えているはずの拳銃に対しても特にこれと言ったアクションを取ることも無く、ただ楽しそうに笑い

「お兄さんにそんなことするわけないじゃん」

と、そう言った少女は背中を支えていた右手で軽く私の方を4回たたきながらほら行くよ〜！ と私に言い。それに私は少しオーバーに、まるで力の入ってはいないくらい豪快に首を縦に振ることで同意を示し、そのまま少女の肩に手を添えながらなんとか立ち上がる私「ほらいこ、速くしないと待ち合わせに遅れちゃうよ、シーマお姉さん」

と、歩き出す前にそうシーマの方を見ながら少女は笑い、そのまま私に声をかける。それに促されるままに私は店の外へと向かって歩き出し、それを少女が支える

「…今日はほんと、来て良かったんだが悪かったんだか」

と、すっかりと良いの覚めてしまったクリアな頭で、あの不思議な少女が本当に義娘なのか、それとも他の何かなのかを考えつつ、私と少女の後を追って店を出る

「……」

その一連の様子を、じっと黙って見ていたカウンターを担当する店員は、私やシーマのグラスや食器を片付けながらただ一言

「魔女見てえな嬢ちゃんだったな」

と、呟いたのだった

## 機体解説 ツダ

「EMS-110 (CS) ツダ・エイドリアンカスタム機」は正式量産が決定したツダを基礎フレームレベルから徹底的にエイドリアン専用に改修、次世代MS開発のためのテストベットにするためにペズン工廠や統合整備計画など、ジオンがこの時点で推し進めていたあらゆるMS開発計画、近代化改修計画などを総動員して作り上げられたワソフ機である

機体外見は全身に増加装甲を追加し、機体が意見は頭部以外原形をとどめていない特異な外見となったその機体は、連邦系MSに似たフロントスカートや特徴的な胸部の排熱口やコクピットハッチなどが胴体よりも少し前に盛り上がるような、連邦系MS特有の胴体構造に特徴的だったツダの肩はゲルググのごとごととしたものでも、ザクのようなスパイクアーマーでもないスリムなボックス型に近い、肩の関節を装甲で挟むような特徴的な仕上がりで、四肢も追加のスラスターや増加装甲によりしつかりとフレームなどは保護されている。頭部はそのままに両側面に後付けでバルカン砲を後付けし、更に左側のバルカン砲には指揮官用のブレードアンテナの補助を目的に広域通信用の増幅モジュールを搭載して更に指揮能力を高めている

脚部はドムの脚部を参考に推進剤タンクを脚部の裏側に搭載し、それを増加装甲で覆った大型化した足は、一見すれば鳥のように細く、鉤爪のように細い3本の足の中心には補助用のスラスターを追加しており、脚部自体も増加装甲内の推進剤タンクからの燃料供給とスラスターのエンジンにより大部分が占められており、著しい耐久性の犠牲と引き換えに更なる加速力を得ている。後脚部の側面外側にはエンジンの排熱用ダクトがある

背部には新型の土星エンジンをメインスラスターに搭載しているが、メインスラスターをXの字に補助用のサブスラスターを搭載しているため背部ランドセルには燃料積載とサブジェネレーターの増設を目的にF91にも似た箱型に変化、大型化しており、ゲルググMやJで使用されるプロペラントタンク2基を前述の2機同様斜め下に

延びる用に接続され、稼働時間を延長している。最後に機体カラーは本人の要望からミッドナイトブルーで全体統一しているが関節、足底から踵、つまさきにかけてと首などは黒味がかかった灰色で塗装されている、と前話の通りである

追加説明として両腰と臀部、ランドセルの左右にハードポイントがあるので武器弾薬の携行が可能で、ランドセルに接続されたプロペラントタンクは当然分離が可能である

またランドセルのサブジェネレーターにはエース向けに先行量産が始まったMS-14のジェネレーターを、本体に搭載されるメインジェネレーターとしてペズンにて開発中のMS-17のジェネレーターを使用することでMSでは携行不可能な高出力ビーム兵装の搭載を可能にしている

また全身に搭載したエンジンとバーニアにより実現する高機動性はまさしくワンオフの名にふさわしい殺人的なもので、それを制御するために機体には物理的、電子的なりミッターを搭載している

#### 「武装解説」

「頭部60mmバルカン砲」

「頭部に搭載されたバルカン砲、近接戦闘時の牽制用として搭載される」

「セイバーシールド」

「両腕に搭載可能な攻防一体の兵装。シールドは取り回しやすいカイトシールドのような形状をしており、シールドの下部にはビームサードの発生装置を内蔵しており、更にシールド自体に2門のビームマシンガンを装備している

「ビーム・セイバー」

「両腕部に格納された近接用ビーム兵装。特徴的なのは従来のビームサーベルのように細長い棒状のものではなく、薄く平べったい剣状に形成することが特徴であり、使用时には掌の中央部にある穴から取り出して使用する」

「バスターランチャー」

「本機の出鱈目な出力を最大限に活かすために用意された「スキウレ」

と呼ばれる攻城用ビーム兵装を改修したものである。形状は六角形の砲身を備えた大型バズーカのようなもので、後部には排熱口が左側面に、下部には冷却装置がむき出しの状態で搭載されており、外から見るとこの冷却装置が弾倉のように見える。基本的にはランドセルに装備され、使用時には脇から通すようにして装備する」

「大型ビーム・マシンガン、シュツルム・ファウスト、MMP-80マシンガン、ザク・マシンガン、ジャイアント・バズ等」

「統合整備計画やペズン工廠製MSが使用可能な兵装は全て使用可能となっており、これに関しては原作通りであり変更点等はない」

## 第4話 束の間の休息

「ありやりや……こりやまた随分と？まれちやってますねえ……」

軍服に身を包んだ副官が宇宙港のロビーで服を着崩し、顔も真つ赤にした状態で少女に体を支えてもらいながら眠るだらしない私の姿に、呆れたと言わんばかりのため息交じりでそう言い放つ

「あたしが羽目を外さしちまったんだ、今日くらいは大目に見てあげてよ」

と、助け舟を出すシーマに、副官は被っていた帽子を脱ぐとシーマに向き直り

「いえいえ、自制が出来なかったこの人が悪いだけです。今日は本当にありがとうございます」

と頭を下げる副官に、シーマは少しバツが悪そうに後ろ頭に手を触れると

「やめておくれよ、そんな畏まった対応されちゃむず痒いじゃないか……」

と、そう言いつつも謝罪自体は受け取るシーマに、副官は頭を上げながら

「しかし……まさか中佐殿と司令官だけでなくアデリタさんも一緒にいたとは思いませんでしたよ」

と、少女をアデリタ、と呼びながらそう言った副官に、シーマはこう尋ねた

「この子のことを、あんた知ってるのかい？」

その問いに、副官の眉が微かに顰み

「ええ、以前司令官をお迎えに上がった際、ご自宅で拝見したことがあります、その時司令官から養子だと言う風に紹介されました」

とそれに答える。それに漸く少女の言葉が本当だったと理解したシーマに、少女はまるで

「本当だったでしょ？」

と言いたげに少女は笑みを浮かべてシーマを見つめており、それにシーマは額に手を当て項垂れた後、降りた髪を巻き上げるようにやや

大袈裟に頭を上げると

「疑って悪かったよ」

と、腰に手を当てて少女：アデリタに謝罪するシーマに、アデリタは笑顔のまま首を左右に振り

「んくん、気にしてないし、私も身分証とかそういうので証明すればよかったです話だから、気にしないで？」

お互いに悪いつてことにしましょ！ と提案するアデリタに、シーマは少しだけ肩に張っていた力を抜くと、自然な笑顔でありがとう、とアデリタに礼を言う

「しかし…まさかアデリタさんがいらっしやるとは思いませんでしたよ」

と、二人が話し合えるタイミングを見計らって副官がそう尋ねる。それにシーマは眉を擡めて

「へえ…？」

と、少し不愉快げな声を出す、それにアデリタはあはは、と苦笑いを浮かべた後

「何となくお兄さんに助けが必要な気がしたの」

と答え、その答えに副官は首をかしげるがアデリタはシーマに対して

「ごめんね」

と彼女を説得させるために自分が嘘をついたことを認める謝罪をする中、シーマはふん、とそれを鼻で笑うと、左手で彼女の頭を少し強い力で撫でながら

「あたしは気にしてないさ、でも次からはちゃんと名乗るんだよ」

アデリタを許すシーマの笑顔に、まあ悪い関係性じゃないみたいだし置いといていいか、と、そう思う副官であった

その後シーマは私をきちんと送り届けたので飲み直す、と言って二人と別れ、残った二人は起きない私にため息を吐きながらもズムシテイへの帰路に着いたのであった

「ああ〜いてえええええ……」

翌日、自宅で目を覚ました私は初めて感じた二日酔いの猛威に喘ぎながら、水を求めてふらつく足取りでリビングへと降りて来る

「おはよ、お兄さん」

するとソファーに座り、バターとジャムがたっぷり塗られたトーストを小さな口で頬張るアデリタが居た。彼女は私が降りて来たのに気付くとトーストをテーブルの上に置いた皿に置き、私へと顔を向けるとそう挨拶してくれる

「ああ〜……」

しかしその挨拶に挨拶を返せるだけの体力がない俺は二日酔いにあえいでいるのか返事なのか良く分からない声を上げ、軽く手を振ることで挨拶であることをアピールしつつ、キッチンに設置した冷蔵庫から自分用のミネラルウォーター入りのペットボトルを取り出し、その中身に少し口をつける。冷たい水が全身に駆け巡るかのような感覚に思わず息を吐いた後

「昨日の記憶ないんだけど…僕がどうやって帰れたか知ってる？」

とアデリタに尋ねる。気のせいかもしれないけどほとんどしゃべり方は変わらないが、その印象は普段の彼よりもずっと幼いもので、それにアデリタは頬張っていたトーストから口を話すと、急いで口の中のものを咀嚼し、飲み込んでから答える

「酔いつぶれたからシーマさんが港まで運んでくれたの、そこから大尉さんと私でお家まで運んだのよ」

と、応えてくれたアデリタに、私は深いため息を吐きながら大きく肩を落とす

「まじかあ…やらかしたかあ…」

と、深いため息とともにそう呟いた直後、私は突然頭に走った激痛に片手で頭を抱えて呻きながらミネラルウォーターを豪快に飲み干し、一呼吸入れてから

「迷惑かけたなあアデリタ、ありがとう」

と、感謝する私に対し、アデリタはトーストを完食すると、ポット



からティーカップにお茶を入れながらこう返す

「シーマさんと出会えたから私は気にしてないけど、大尉やシーマさんにちゃんとお礼を言っておいてね？」

と、そう言ってお茶を飲むアデリタに

「分かってるよ…とりあえず今日はせつかくの休みだからもう少し寝るよ」

と、ペットボトルを捨てながらそう言った私は、そのまま自室に戻ろうとするも、それをアデリタが止める

「ええ〜!? せつかくの御休みなんだから家でぐうたらしてないで外に出かけましょうよ〜!」

とソファアに両足の膝を乗せ、背もたれに両手を置いて体を支えるようにしてわたしに向き直ったアデリタの抗議の声が頭に響き、懸命に沸きあがる苛立ちと怒りと気分の悪さを堪えながら

「ああ〜悪いがこの状態じゃ無理だ。出かけるのは夕方からにしてくれ」

と、お願いする私に、アデリタは不満そうに私を細めで見つめた後「しようがないなあ…」

と、しぶしぶと言った様子で了承してくれたので、礼を言って自室に戻り、私はベッドに倒れ込み、そのまま日が傾くまで惰眠を貪った

そして時間は過ぎ去り、時刻は18時、コロニー内の空が夕焼けに染まり始めた頃、私はアデリタを連れて街灯などの証明が点灯し始めたズムシティの街を歩いていった

「お兄さんところしてゆっくり街を歩けるなんて何年振りかしら?」

上機嫌に笑うアデリタの服装は酒場の時と同じで、私も黒のズボンに黒のVネックに下は半袖、上着として黒のパーカーを切ることで黒

で統一した衣装で彼女と並ぶ。どう考えても二人で並ぶ場合色が離れすぎてて違和感を持たれるコーデだが特に二人とも気にすることも無く街中を歩く

戦時下であり、完全配給制となつてから既に3カ月。コロニーの空気は開戦前と比べてもそこまで変わりはない

しかし閉店や休業により閉められた店が散見し、人通りもかつてに比べれば明らかにその数は減少していた。しかし

「本日未明、ドズル・ザビ中将旗下の第221パトロール艦隊が、連邦軍の輸送艦隊を撃滅。これによりルナツーに対して更なる打撃が…」  
街頭テレビでは毎日のようにプロパガンダの戦局報道が繰り返され、町のいたるところに「戦争に協力しよう」、「戦争に勝とう」と言う宣伝文句のビラや広報誌が張り出されている

「昔は独立を勝ち取ろうだけだったのにな…」

軍の募集ポスターを横目でちらりと見た私は、足を止めることなくそう呟く。その目はどこか遠くを見ていて、呟いた声は悲し気…と言うよりもどこかせいせいとした、と言いたげに爽やかなものでもあった

「あら、貴方にとってあの頃は帰りたいものなの？」

と、アデリタは私の正面に回ると、下から私の顔を見上げてそう尋ねて来る。私は彼女の好奇心から来るのか、それともからかいたいからそうしているのか分からない笑顔を見つめ

「さあね。帰りたいかと聞かれたら帰りたくないって断言できるけど、あの頃は楽しかったよ」

、コロニー内における太陽の代わりであると同時に、コロニーと言う構造物を支える支柱と、シリンダータイプ特有の反対側の町までしっかりと見る事の出来るこの円形の大空を見上げながらそう答えた私に、アデリタはそっか、と見上げていた顔を降ろす。その時の彼女の顔にはかすかな影が見えたが、見上げていた私にはその様子は気づけず

「さ、湿っぽい話はやめにして夕食の話しようよ、今日は何が食べたの？」

と、視線をアデリタに戻すと、そこにはいつも通り笑顔を浮かべる彼女の姿があり、あの影はどこにも存在しない

「ハンバーグが食べたい！ 前食べたベーコンとハツシユドポテトがついているの」

その要望を受け取り、私はじゃあ今すぐに向かおうか、と彼女の手を取り、彼女が食べたいと言ったハンバーグを提供するレストランへと向かう

この日は夕食を食べた後、少し食後の散歩を兼ねて街を巡ってこの日は終わった

その翌日、本国で休暇を取っていた私の耳に連邦軍の大規模な攻勢によりオデッサは劣勢となり放棄が決定、宇宙へと上がるヨーロッパ方面、オデッサ守備を担当するコーカサス地方の資源地帯防衛部の撤退してきた部隊の護衛と回収を目的に我々にも出撃命令が下った

## 第5話 流星は軌道上を駆ける 前編

この日、ズムシテイの軍港には何やら重苦しい空気が流れていた。「オデッサが放棄と言うのは本当なのか…?」

「ありえない…欺瞞情報だろう?」

「だとしたら総帥府からの発表が直ぐにされて否定されるような話だろうか? もう流れ始めて半日経つのに不気味なぐらい静かなんだぞ…!?!」

皆一応に同じ話題を話すさまはある種異常であり、重苦しい空気の正体は間違いなくオデッサが陥落したと言う噂の流布に合った

「状況は!?!」

軍港内での重苦しい雰囲気と、そこにいた人々が話す内容に、知らず知らずのうちに焦らされていた私は、自分の乗艦に乗り込むと速足で通路を歩きつつ、待機していた下士官に少し息を荒くして尋ねる

「ハッ! 現在情報の統制により憶測など様々な情報の流布により、艦隊司令部内でもかなりの混乱が起きているようで、オデッサより打ち上げられた友軍の救援を行え、以上のことが何もわからない状態です」

と、応えてくれた下士官に私は苦虫を噛み潰したような渋顔を作ると、下士官に

「分かった、引き続き情報の収集と分析に当たってくれ、後はブリッジに向かうだけだからもうつきそいは不要だ」

と言うと、下士官はその場に立ち止まり、敬礼と共に私を見送る、それに上半身を捻って彼の方を向き、敬礼を返すと、私は逸る気持ちを抑えきれずにブリッジへと走り出す

「大尉! 状況は!?!」

ブリッジに入るなり荒く息を吐く私の声に、何事かとブリッジクルーたちが一応に私へと振り返り、それに階級で呼ばれた副官はそれに対し無視していいと腕を軽く振ってジェスチャーを送ってから振り返り

「燃料補給とツダの補給パーツの搬入にあと2時間必要です」

と答える。それに私は胸に左手を当て、しゃっくりにもたれた特異的な声を出しながらも、何とか呼吸を整えようと深呼吸をしつつ、ゆっくりと副官の隣にまで歩いてくる

「わ、分かった…ッ！ すまない…」

と、副官の隣に着いた私に、副官はやれやれと言った様子で肩を竦めると、私の方に手を置き

「貴方が焦つちや皆不安がっちやいますよ？ 堂々と構えて、いつも通り私たちに自信をつけさせて下さいよ」

と、少し硬い口調でそう私に声をかける副官に、何とか息を整えた私は、最後に大きく深呼吸を1回行ってから副官の方を向き

「そうだな…ありがとう大尉。いつも負担をかけるよ」

と謝罪と感謝を示す私に、副官は笑顔で

「いつも勝たせてもらってますから、気にしないで下さい。貴方の副官でもありますしね」

と、頼もしい答えを返してくれた。それに私も気持ちを切り替えようと頬を両手で叩くと、オペレーターにこう命令した

「艦隊司令部に通信回線を開いてくれ」

といい、それにオペレーターは了解しました、と言って自分の作業を一度中断して艦隊司令部との開戦を開くための準備を始める。そのオペレーターから正面の主モニターに視線を移しながら

「艦隊司令部には何人か私を気に入ってくれてる上司がいる。彼らを通じて情報を引き出せないかやってみるよ」

と言うと、副官は頷き

「信賴しています。それと後は積み込みだけなので、私は下で陣頭指揮を執って来ますので、ここをお任せしても？」

と言ってくる。それに私は後ろ手に手を組み、艦長らしく威厳たっぷりに胸を張ると

「おいおい、誰に聞いているのそれ、私この司令官だよ？」

と、そう言っただけ早く行けと言わんばかりに正面を向いた私の背を覗ながら、副官は小さく息を吐くと

「ではよろしくお願ひしますよ」

と、そう言つて足早にブリッジを後にし、私はそのまま出港準備を終えるまで艦隊の指揮を執った

その後、予定より20分速く準備を終えた第121パトロール艦隊は即時出港。一路ヨーロッパ方面の静止衛星軌道に向けて移動を開始した

「艦隊司令部から入手できた情報をまとめる限り、連邦は黒海沿岸、ヨーロッパ、中央アジアの方面から順番で攻撃を仕掛けたいらしい」

そして私は艦橋内で副官に収集した情報について話していた

「つまり北極海を除くユーラシア大陸の全方位から攻撃したと言う事ですか？ 地球が壊滅的な打撃を受けているはずなのに……」

と、副官は珍しく眉間にしわを寄せ、険しい顔つきのままそうこぼす、それに私も同意しつつ

「それだけじゃない、当初敵主力と思われていた黒海や中央アジア方面の大部隊は囷で、本命はMSを主力としたヨーロッパ方面の中規模の部隊だそうだ」

私の告げた情報に副官は驚くも、すぐに元の険しい顔つきに表情を戻し

「まさかこんなにも速く前線にMSが配備できるなんて、国力はもちろんですが人材も底知れないですね」

と、改めて連邦の底力の、その底知れなさを実感する副官に続けて私は

「しかもこちらが主力を黒海方面に向け。ヨーロッパが手薄になるまでMSは伏せていたらしい。そのせいで一気に劣勢になったヨーロッパ方面から戦線が瓦解、残存する防衛部隊は最終防衛戦で徹底抗戦を続けているらしい」

と答える。それに副官は応えることは無く、互いが無言のまま、私たちの会話に聞き耳を立てていたブリッジクルーたちも手は止め

ないまでもその効率は大きく下がり、皆一様に表情に影を落としていた

「負け戦になりますね…」

副官が深いため息とともに、この場にいる全ての者が抱いていた言葉を吐き出す。それに私は腕を組んだまま

「…今は目先のことを考えよう。重力下運用を想定した装備しかないやつらが上がって来る。私たちが助けなきや連邦的的にされてしまう」

その負け戦が何を指すのか、なんとなく理解しながら私はそれに対する明言を避けてそう話す。その顔は少し険しく、眼前に佇む地球一点を見つめていた

「そう…ですね。我々は今最善を尽くすべきですね」

と、私の様子を見た副官もまた、地球を見つめながらそう呟き、それに私は無言のまま頷くことで肯定を示す。しかし私の中には、胸糞の悪いことが起きる、と言うある種確信めいた予感がしていた

「地表より上昇を続ける光を確認！ 間違いありません、我が軍のH L Vです！」

3日後、軌道上で待機していた我々の耳に、オペレーターが戦闘開始を告げる報告をあげた。

「全艦第一種戦闘配備！ 艦載機を全て出撃させろ！」

その報告を受け、彼は今まさに無数の場発が起こるヨーロッパの大地を見下ろしながら命令を下す。その命令に従い、艦隊司令部により出撃を命じられ、この宙域に集結した各パトロール艦隊や補給船団などから続々とMSが出撃していく

「ツダ、出るぞ！」

最初に出撃したのは私だ、カタパルトが一気に機体を戦闘速度にまで加速させて宇宙空間へと気体を射出し、そのままスラスタを全開にしてH L Vの集結地点となる軌道上へと向かう

「フレッチャー隊と俺の部隊はサイド5方面に展開しろ、敵を一機たりとも近づけるなよ!」

左手にビームマシンガン、両腰にMMP-80を装備し、ランドセルの左側にバスターランチャー、右側にバスターランチャーと同じ全長、横幅の長方形のコンテナを装備したツダを操り、部下たちに命令を下しつつ発破をかける。それに部下たちはいつも通りに威勢のよい返事で応えてくれるので、私はたった1機でルナツァ方面に飛ぶ

全軍の士気を下げないために、今回この救出作戦に駆り出されたのは本国で待機していた部隊がメインであり、その数は凡そ30隻。1個艦隊相当の大兵力である

この戦力を最大限効率よく活用するため、私は指揮下の第121パトロール艦隊を含め3個パトロール艦隊を広域に展開し、攻撃を仕掛けて来る連邦軍をなるべく回収ポイントとなるHLVの集結地点よりも遠くで迎撃し、残りでHLVを收容する…そう言う作戦にしていた

しかしその作戦は、まだ連邦軍が来ていないにもかかわらず破綻した

「なっ…あ…!?!」

予定のポイントに向かう私の眼下に広がるのは、オデッサに群がる連邦軍から逃げようと宇宙へと打ち上がってきた大量の…見渡す限り一面が埋まると形容できるほどのHLVの大群だった

「まず…!?!」

反射的にそう思いながら、HLVの反応を示す赤丸が表示された3次元マップを確認する。そこには当初予測されていた集結地点よりもはるかに広範囲で、かつ数も桁違いに多く赤丸が表記されていた。これでは艦隊がうち上がってきたHLVに飲み込まれて救助はともかく身動きが取れなくなつて戦闘が不可能な状態になってしまう

「防衛部隊は今すぐ高度を上げろッ!」

その考えが頭に浮かんだ瞬間咄嗟に私は無線で叫んだ。それに防衛部隊の所属MS、艦艇は即座に機首を、艦首を上げてHLVから距離を取る。が、当然このアクシデントで艦隊陣形は崩壊、MS隊の陣



形も乱れて当初予定していた防衛線の範囲までもH L Vの集結地点に埋もれてしまったため直ぐに体勢を立て直せるわけもなく

「ルナツー方面より敵艦接近…数6、いずれもサラミスです!!」

そしてそのような時間的余裕も存在しない。悲鳴のようなオペレーターの報告にMS隊のパイロットたちは皆一応にこちらに對してとことん不利に動く状況に怒りや不満、あるいは絶望を露わにするも、私は声を張り上げる

「ルナツーの敵は私が沈める！ 防衛部隊はその間に態勢を整えろツ!!」

H L Vの頭上を飛び越え、一目散に敵へと向かう私はそう命令を下すと、一気にペダルを踏み込む。4機の補助スラスターとメインスラスターから一回り大きい光が溢れ出し、それはさながら流星の如く美しい光の軌跡を残して敵へと直進する

「うっっっ、くっっっ…おおおおおおおお!!」

テストですら命の危険があるとして止められていた最高速度にまで加速した機体は、専用の対G機能を搭載したパイロットスーツを以てしてもなお、搭乗者を押し潰しかねない圧倒的なGを叩きつけて来る

「この程度でええええええええ!!」

満足に呼吸もできなければ、瞼を開くことすらも困難な高G環境下のコクピットでそう叫びながら、私は機体を操り、精密狙撃モードに切り替えたビームマシンガンを構え、甲板上に固定されたボールを狙って3発、放たれたビームの内1発は狙いを外し、もう1発はサラミスのブリッジのすぐ真下に直撃、最後の3発目で縦一列に並ぶボール3機を一度に貫通して艦体に直撃弾を浴びせ、1隻のサラミス級が艦載機の爆発と艦体へのダメージに耐え切れず爆沈、その仇を討たんと残るサラミスから艦砲による迎撃が始まる

「クツ!？」

ロックオン警告に私は迷わず速度を落とし、直進していた軌道を上下左右に不規則に動き回る者へと変更して標準を絞らせないようにしつつ、バスターランチャーをランドセルから抜き取る

「まず一つ……!」

速度を落とすことで幾分呼吸が可能になり、楽に視界を確保できるようになった私は、Gの影響からか震える全身の力を隅々にまで力を込めてその震えを打ち消し、狙いをつけてバスターランチャーを放つ。放たれた光は艦載機を発艦させた直後のサラミス級の艦体を貫通して爆沈させ、更にその爆発の余波で3機のうち2機のボールを破壊させる

そのタイミングで固定具をすべて外され甲板からボールが出撃していく。それに私は舌打ちしつつ精密狙撃モードのままのビームマシンガンを腰だめで構えると、一目散に私へと群がるボールを迎撃する

「そんな直線的な動きがッ!?!」

通用すると思うなよ。と、そう続けるようにビームマシンガンを3度、続け様に射撃してボールを撃墜する。いずれも真っ直ぐに私へと突っ込んできた命知らずな機体である

「くそっ!」

サラミス級から飛来したミサイルに気を取られた隙に接近してきた2機のボールが頭上に取り付けた180mmで私を攻撃し、私は舌打ちしながら放たれた砲弾の隙間に滑り込むようにして回避し

「死ねッ!」

2機のボールに向けて精密狙撃を解除したビームマシンガンを放ち、バラバラにして撃破した、そのタイミングでリチャージしたバスターランチャーを構え

「うっ!?!」

正面に迫るメガ粒子の光に咄嗟に機体を水平にしつつメガ粒子の軌道のすぐ下に潜り込むようにして攻撃を回避する

「このッのッッ!?!」

冷や汗を感じた敵の攻撃に苛立ち交じりに私はバスターランチャーの引き金を強く引き絞り、放たれた光がまた1隻のサラミス級を撃沈させる。が、そのタイミングで左右から2機のボールが私を挟み、近距離戦を仕掛けて来る

「MPでMS相手にやることじゃないな…!」

素早くバスターランチャーをランドセルに戻すと空いた右手の掌から押し出されるようにして出てきたビームセイバーを装備すると、素早く上昇しつつ両腕のセイバーシールドを構えてビームマシンガンによる射撃で上昇した私に追いつくとするボールたちを2機とも撃破

「おっと…!?!」

撃破される直前、左のボールが放った砲弾をステップを踏むように一回転しながら左に避けると、そのまま直上にいたボールを左手のビームマシンガンで撃破し、更に背後から砲弾を放ったボールの攻撃を宙返りで避けると、体を捻りつつバーニアを付加して機体をボールへと向けつつ左手のビームマシンガンでボールを撃破。これで9機、後残り4機のみだが、ここにきてその4機が私を無視してHLVへと向かう

「なっ!?!」

母艦を見捨てるつもりなのか、突然の行動に理解ができないが反射的に左手のビームマシンガンを構える

「ッ!?!」

が、その引き金を引くことが出来ない。なぜならば彼らを撃ち抜けばそのままビームがHLVを傷つけてしまうような位置取りをされていたためである

「チッ…」

抵抗も受けずに悠々とHLVに進むボールに盛大に舌打ちをかました私は、取り付かれる前にし止めようと空いた右手でビーム・セイバーを装備するが、それを防ごうと残るサラミスが私を強引に突破してでもHLVを狙う姿勢を見せる

「こ、このッ…!?!」

何とも悪辣な手を打つ敵に対して、はらわたが煮えくり返るような怒りと、友軍のHLVを速く救わなければならないという焦燥感に苛立つ私は、深い皺を眉間に刻みながら左に飛ぶと左手のビームマシンガンでサラミスを牽制しつつ射線をこちらに集中させ、バスターラン

チャーをリチャージもまだ終わっていない状態で放つ

放たれた光は先ほどのものに比べれば細く小さな光で、それは真つすぐにサラミス級の艦体をちようど真ん中から反対側へと斜めに貫くように直撃し、数秒の拮抗の末に見事貫通、サラミス級は大爆発を起こすが爆沈した訳ではなく、大破炎上と言った有様ではあるものの、以前健在だった

「チー・タフだな…?」

予想以上の耐久力に舌打ちと共に驚きを込めてそう呟く私に、反撃とばかりに残るもう一隻のサラミス級からの艦砲を避けつつ大破したサラミスの陰に隠れて射線を塞ぐとそのまま一気に残る一隻のサラミス級へと接近し、ビームマシンガンを再び精密狙撃モードへと切り替えるとバスターランチャーをランドセルへと戻して両手にビームマシンガンを構え

「沈めー!」

そう叫ぶと大破したサラミス級に銃口を押し付け、私は躊躇うことなくビームマシンガンを連射した。幾本ものビームが既に満身創痕のサラミス級にとどめの一撃となりながら、多少は減衰しながらもその艦体を貫通したビームは残るサラミス級の艦体を穿ち貫通し、それが20本を超えた瞬間、ハチの巢にされたその艦体から激しくスパークを走らせるサラミスを見た私は、縦にした大破炎上中のサラミス級を足場に一気にその場から飛び退く。すると2隻のサラミス級はほとんど同タイミングで爆沈

「ふう…ふう…!」

その爆沈した敵艦へと油断なくビームマシンガンを構えながら、私はひどい息苦しさを感じながらも息を整えようと深呼吸しつつ、ポールを直ぐに迎撃しに行こうと動きですが、それよりも速く、コクピット内に突如としてロツクオン警告の警報が鳴り響く

「何?!」

その警報とモニター上に表示された敵の方向に私は即座に機体を左に移動させ、私が今立っていた場所を直上から飛来したビームを回避する

「まだいるのかッ!？」

小規模とは言え一個艦隊を壊滅させた後に追加が来るのか、と絶望しそうになる己を唸るような声と共に頭を激しく振って打ち消し、気合を引き締める。するとそのタイミングで敵の接近警報が鳴り響き、先ほどと同じ方向からであることに私は直下へと対比しつつ向きを変えて敵に向き直る

「なっ…!？」

そこに映ったのは白と赤で塗装されたシールドを構えた、シールドと同じ赤と白でカラーリングされた、あのルナツで観たMS…確かGMとか言う機体に似た、連邦製MSが私へとその手に持つ銃を向けていた

「くそつたれ…!？」

そこまですて落ち武者狩りがしたいのか!？ と、コクピットの中で叫ぶと、私は両手のセイバーシールドをGMに似た機体…ジム・コマンドへと向ける

戦いは次の舞台へと移りつつあった

## 第5話 流星は軌道上を駆ける 後編

地球、静止衛星軌道上…

同、ルナツー駐留第1艦隊、第1戦隊旗艦 ドレイク級MS空母一番艦「ドレイク」艦橋

艦長のエイパー・シナプス中佐は、先行したサラミス級が全艦撃沈された、という報告に深いため息を吐きつつMS隊の出撃を命令する「楽には勝てんな…」

甲板に続々と上げられ、出撃していくMSを見送りながら小さくつぶやいた

ここで一度蛇足的な話をするが、今回連邦軍がこの追撃作戦に投入したのはルナツーに駐留する宇宙反攻用の第1艦隊に所属する2個戦隊であり、補充を終えたばかりの彼らは、二手に分かれて別方向からHLVを回収しようとするジオン艦隊に対して攻撃する作戦を採用し、距離の観点から先に第1戦隊がジオン艦隊に対して攻撃を開始した

そして話を本編に戻す、第一戦隊はサラミス級14隻、マゼラン級2隻、ネルソン級MS軽空母2隻、ドレイク級MS空母一隻からなる総勢13隻からなる空母打撃群であり、艦載機は空母以外は上甲板にワイヤーで固定したボール3機のみで、ドレイク級空母にGブラスター2機とサイバーフィッシュ12機、MSはネルソン級2隻で12機、ドレイク級が10機で合計22機と大部隊であり、これにサイド5、6方面に展開していた防衛部隊が即応し、ムサイ後期生産型6隻、MS24機がこれを迎撃する形となる

ジオン側は流れ弾がHLVに向かうことを恐れ、戦力を分けて敵艦隊から見て左右斜め前から攻撃を開始し、正面に強行突破しようと言う敵艦載機をMS隊が必死に押し留める

GM2機が私の指揮するMS隊のザクR-1にビームサーベルを

構えて襲い掛かる。

「オリツクー！」

臀部のハードポイントに装着されたヒートホークとザクマシンガンを交換しながら白髪のラフベリーショート、壮年の渋顔の男性：「ラビデイ」が同僚の名前を呼ぶ

「だから自前の2本持つとけよ!？」

それにオリツク、と呼ばれたブラウンの茶色のオールバックの青年がラビデイのすぐ近くで1機のGMを近づけまいとザクマシンガンを撃ちながら左手でヒートホークをラビデイへと放り投げる

「そしたら武器が持てないだろ!？」

と、無茶苦茶な反論をしながら、その顔には獰猛な野獣を思わせる鬨争心剥き出しの笑顔を浮かべ、ラビデイは投げ渡されたヒートホークを右手で受け取ると斧刃をこすり合わせてからヒートホークを起動し、刀身が鈍い鉛色から眩い白い光を放ち始め、リーチの差を活かそうと左のGMが右よりも先行して左手に持つビームサーベルで鋭い刺突を放ち、それをラビデイは右手のビームサーベルでサーベルの腹を叩いて吹き飛ばすと、そのまま上段に構えたヒートホークで右肩を切り裂き、そこに後ろから送れた右のGMが同じく左手のビームサーベルを大上段に構えて突っ込んで来る

「俺の得物はこいつだけじゃつ、ねえ!!！」

それに対し、振り下ろしたその前鏡の態勢から素早く回し蹴りを放つ。まさかサーベルやホークでの近接戦闘ではなくMSのマニピュレーターで徒手空拳を仕掛けられるなどと思っておらず、がら空きのコクピットブロックにザクの足底を食らい、装甲を足底の形に歪めながら吹き飛ば

「素人が!!！」

と、そう言い放ちながら背後に振り返るラビデイ。するとそこにはビームサーベルを振り下ろそうとした左腕を掴まれ、コクピットにゼ口距離射撃を受けて沈黙するGMの残骸と、それを達成したオリツクのザクが居た

「ん？ おいおっさん!？ さつさとホーク返してくれよ！ それが無

いからこんなばくち見てえな戦い方する羽目になっちまったじゃねえか!？」

そしてそれを眺めるラビディに気づいたオリックはGMを蹴り飛ばすと、ザクマシンガンを持たぬ右手でラビディの乗るザクを指さしながら怒り、それに分かったわかったと面倒くさそうに返事を返しながらヒートホークを投げ渡し、空いた左手でザクマシンガンを抜き取ると。次の得物を探して2機は戦場を駆け抜ける

一報戦場の中心ではエース対エースの一騎打ちが行われていた

「落ちろー!」

私はそう叫ぶと両腕のセイバーシールドに搭載されたビームマシンガンと精密狙撃モードのままのビームマシンガンを連射して弾幕を張りつつ、その勢いを弱めようと牽制で放たれるジム・コマンドの攻撃を機体に加減速をかけて狙いを絞らせないようにしつつ機体がまるで揺れているかのように左右への移動を混ぜて不規則な機動を取ることで相手を翻弄する

「チー!」

こちらの攻撃は当たらないが敵の攻撃も当たらない、そんな千日手のような状態に業を煮やした私は機体に急制動をかける。突然のことに驚いているのかジム・コマンドの動きが鈍るが、すぐに私最短距離で突撃するように姿勢を変えると、一気に接近しながら動きを止めた私を狙うが、その銃口からビームが出るよりも速く、暴力的な加速で一気に急上昇を始めたおかげでビームは宙を切る

「二度限りの初見殺しだ!!」

ビームマシンガンを臀部のハードポイントに装着するとセイバーシールドのビーム刃を展開しつつシールドのビームマシンガンでジム・コマンドに牽制射をくらわし、狙った通り斜め下に滑り込むようにして前進することで、向きを変えながら移動することになり、私が負いづらくなることで少しでも距離を取ろうと画策する

「よしっ!」

思い通りに動いた敵に対して思わずそう声をあげると私はこれま



でしていた手加減を止めて最大加速で一気にジム・コマンドに迫る。当然殺人的とまでは形容しないが、それでも常人ならば意識を失いかねない強烈なGに私は奥歯を強く噛みしめ、全身に力を張り巡らせる。とこれまでの倍以上の速度で加速した私の余りの速さに狼狽え、逃げるか迎撃するかで即断が出来ず、その間に私は自分の間合いにまであと少しと言うところまで詰める。それを見たジム・コマンドが咄嗟に私に盾を投擲してくるが、それを機体をくるりと一回転させて軌道を変えることなく攻撃を避けるも、そのわずかな時間で咄嗟にビームガン構えながらビームサーベルを引き抜こうとするジム・コマンドは、私の機体を一直線に貫くように脳天に向けてビームガンを放つ。「ツんぬらろおおおおおおおおおお!!」

それに私はそう雄たけびをあげると、背部のバーニアを同時に噴射して機体を少し下にずらしてビームを回避し、そのまま突き出した両腕でジム・コマンドの両腕を肩から斜めに突き刺す

「とっ…」

そのまま両腕を切断されたジム・コマンドの胴体をクロスさせるように切り払う

「ったあああああ!!」

勝利の雄たけびを上げながらビーム刃を消して素早くその場から離脱する私。そして離れた直後にスクラップ溶かしたジム・コマンドが爆散し、私はそのまま左手にビームマシンガンを装備しなおすと3Dマップ上に投影された敵味方の位置から戦況を把握しつつビームマシンガンで友軍機の援護に回る

現状正面の敵艦隊を何とか押し留めているが、既に6隻中2隻が戦列を離脱し、MS隊も2割近い損害を出している。単純な戦果で言えばこちらが優勢だがそもそもからして戦力差から見て圧倒的な不利であることは変わらない

「クソ…このままじゃ押しつぶされる…!」

友軍機1機に4機が仮で追いつくがセイバーフィッシュを4機ともエンジンを狙撃して破壊した私はガンカメラを除いたままそう苦々し気に言い放つと、接近してきたGMのビームサーベルを左腕の

セイバーシールドにビーム刃を展開させて受け止めると機体スペースに物を言わせて強引に押しつけ、右手のセイバーシールドのビームマシンガンをもつて向けて射撃し撃破すると、私は右手にビームマシンガンを持ちなおすとバスターランチャーを引き抜き

「母艦を引かせるしかないな……！」

と、覚悟を決めると一気に敵艦隊へ向けて肉薄し、それに気づいた4機のセイバーフィッシュが私の背後に回って来る

「邪魔……!?!」

時間が惜しいと言わんばかりにそう吐き捨てた私は機体を逆噴射して機体に急制動をかける

「がああ……!?! ああああああああ……!!」

骨が軋みあがり、圧し折れる幻聴が聴こえてくるほどのGに晒され、私は叫べる限りの絶叫を上げ（実際には満足に口も開けられず絞り出すような呻き声）ながら、バルカン砲を放つセイバーフィッシュ達へと水平姿勢にした機体の頭上にシールドを構えて機体全身を隠し、バルカン砲を弾きながら一気に突撃し、それに慌ててセイバーフィッシュ達は散開して距離を取ろうとするが

「ドッグファイトの距離で出来ると思うな?!」

と、そう叫びながら内側の2機をビーム刃で機体を両断しつつ強引に抜けると、そのままバレルロールしつつ急旋回してこちらと距離を取ろうとする2機の内、左の機体を両腕のビームマシンガンで撃墜し、その間に私へと方向転換した残る一基がミサイルを2発放つ

「ッ……！」

咄嗟に右手のシールドを掲げ、その直後にミサイルは機体に直撃して爆炎に包まれる。それを見たセイバーフィッシュのパイロットはきつと「仕留めた」と喜んだことだろう。悠々と機首を翻して友軍の救援に向かおうと背を向けた、その背中に爆炎を突き破り、ビームマシンガンの光弾がセイバーフィッシュに襲い掛かる。まさかセイバーフィッシュのパイロットも撃破したと信じた敵から攻撃を受けるなど思ってもいなかったのだろう、碌に回避機動も取れずに撃墜される

そして爆炎の中から現れたのはシールドが消え去り、左腕の前腕部が大きく抉れて内部のフレームや機構が露出し、激しく放電しながら、胴体や右肩、頭部に恐らく破片で着いたであろう幾つもの傷を受けたツダが左手に持つビームマシンガンを構えていた

「くっ……！」

直撃を受け、戦闘継続が困難なことを示す赤色のランプが点灯し、一気に赤く染まったコクピット内で、私は悔し気に歯を噛みしめるとモニターを操作して機体の損害状況を表示させつつ的にならないよう機体を移動させる

「くそ……!？」

表示された機体の状態は推定でも中破判定の損傷具合を示しており、私は己の不甲斐なさに思わずそう吐き捨てながらビームマシンガンを臀部にしまい、バスターランチャーを抜き出すと捨て身で敵艦隊に突撃する

「MSが防衛線を突破しました！ 距離は670、本艦に接近中！」

そしてそれをレーダーで捉えたドレイクのオペレーターが焦りからか少し力を込めた早口気味にそう報告をあげ、シナプスが素早く迎撃を命じる。瞬く間に友軍艦隊と交戦するサラミス6隻、マゼラン2隻を除く艦艇から対空砲火が上がるが、私はそれを片腕を失い、右側面のバーニアの一部使用不能と言う機体バランスの不安定化と機動性の低下をもともせず、まるで泉の上で舞い踊る妖精のように攻撃を凌ぎ、片腕で構えたバスターランチャーの狙いをドレイクの甲板中央につける

「そんなどでかい凶体してるなら、母艦はお前で間違いないな!? さっさと死ねえ!!」

疲労と焦燥、そして何より戦場の空気にはまり過ぎた私はそう叫びながらバスターランチャーの引き金を引き、放たれたビームは真つすぐにドレイク級を貫くかに思われた…が、しかしその一撃を突如としてドレイク級の前に船体の横腹を晒しながらサラミス級が割り込んで来る

「なにっ!？」

そのまま放たれたビームはサラミス級の船体中央付近の上部甲板を貫き、ドレイク級の一番上の甲板の後部に直撃し、過度のあたりを削り取るように通過し、直撃を受けたサラミス級の被弾箇所から爆発が起こる

「ずれた…!?!」

狙いを大きく外した射撃結果に思わずそう叫びながら、私はあのミサイルによる影響で書き感性に不具合が起きたか!? と素早く原因をシュミレートしつつ、バスターランチャーをしまい、ビームマシンガンを抜き取るとシールドのビームマシンガンとの同時射撃でドレイクの盾となるように射線に割り込んだまま対空砲火を上げるサラミス級へと弾幕を張る

「さっさとくたばれえええ!!」

ブリッジから艦体全体をくまなく破壊するように、ばらまかれる光弾が命中するたび、表面で連鎖的に爆発が起こり、瞬く間にサラミス級の対空火器が潰され、満足に弾幕を展開できなくなった瞬間、サラミス級の艦体に接近した私は逆噴射をかけて機体を減速させつつサラミス級の上部甲板を越えるようにして通過し、ドレイク級の甲板上に向かって着地し、セイバーシールドのビーム刃で甲板を抉るようにしながら着地の勢いを殺す

「無理やりにでも仕留めるッ!」

最早手段など選んでいられない。そう言わんばかりに叫びながらビーム刃を消し、ビームマシンガンをドレイクのブリッジへと向ける。が、その時突如私の右側から接近警告が上がる

「はあ?」

それに私が反応するよりも速く肉薄したジム・コマンドが左腕で強引に私の左腕を掴んで捻り上げられて大きく的を外してしまう

「なっ!?!」

驚愕に声を上げながらも私はジム・コマンドに対応しようとするも、捻り上げられた左腕は完全に関節部を振じられたせいで破壊されており、私はその事実には舌打ちしつつバルカン砲を放ってジム・コマンドの頭部を攻撃、見事にバイザーを破壊され、頭部をハチの巣にさ

れたジム・コマンドは文字通り頭部を爆散させながら体制を崩すも、そのまま右手に持つビームガンで私の胴体を狙う

「くそっ…!?!」

それに私は苦々し気に顔を歪めながら声を上げ、咄嗟に右腕部に内蔵されたビームセイバーを起動させる。当然腕の中で起動したビームセイバーは文字通り内部機構を瞬時に焼き溶かし、掌からビーム刃が現れる

「駄目で元々だあああああ!!」

と、叫びながら最早満足に動かない腕を文字通り振り飛ばすほどの勢いで振り被り、見事ビームガンを構えていた腕ごと胴体の半分ほどを斜めに切り裂く。その代償に前腕部は真つ赤に赤熱化しながら焼き千切れ、間髪入れずに私は左腕を捻り上げられた状態から上半身を振じてまで勢いをつけて右腕を振りかぶった影響で倒れそうになる態勢をスラスターを全開にして無理矢理押し留めると、左腕を掴むジム・コマンドの腕を無理やり振りほどいてその場から飛び上がり

その刹那にジム・コマンドは大爆発を起こし、至近距離でその影響を受け、両足のひざ下まで爆発の影響で装甲が剥げ落ち、焼き焦げてしまうが何とか機能の損失を免れながらもドレイクから離脱した私は、肩で荒く息をしながらドレイクから離れたことで再開された対空砲火から必死で逃げ回る

しかしドレイク級は文字通り甲板上で発生した爆発により辛うじて甲板を貫通して内部にまで爆発の影響は及ばなかったものの完全に融解して使用不能となり、船体が大きかったこともありブリッジが破壊されるほどの影響は無かったものの、破片が幾つもブリッジに命中したのか大きささまざまな穴が空いており、その選手がゆっくりと左に回答を始め、連邦艦隊はそれを守るようにドレイクを中心に固まりながらゆっくりと後退を始める

「ガハッ!? ゲホッ! エホッ!」

最早息を切らし、激しくせき込みながら枯れ果てた呼吸音を辛うじて取りながらシートに体を預ける私は、その光景に何とか友軍を守りきれた、と安堵を浮かべた。その時である

「サイド6方面より新たにサラミス級10、マゼラン級4、大型艦2！」

と、悲鳴のようなオペレーターからの報告に、この宙域にいた全ての者が絶望した事だろう。しかし私は友軍を救うためにゆつくりと機体を新たに表れた敵艦隊へと向け、私の意志を表すかのようにツダのモノアイが強く光る

「ザザ…少佐…聞こえザザ…少佐ッ！」  
「っ!？」

そのまま敵艦隊へと向かおうとした私の耳に、この場所で聞こえるはずもない人物の…デュバル声が聞こえ、その直後に私の目の前にツダが現れる

「んなっ…あ…」

驚きの余り声も出せずに固まる私の機体を目の前のツダは抱き寄せると

「よく耐えてくれた。後は我々に任せて欲しい」

と、再び声が聞こえて来る、それに私は涙を流しながら

「あ…！ 大尉ッ！」

と、デュバルを呼ぶ。それに回線越しに困ったよう唸った後、やれやれと言った声質で

「全く…今の私は少佐だよ、少尉」

と、そう言ったデュバルの声質はとても穏やかなもので、そんな彼の後ろを更に2機のツダが通過して敵艦隊へと向かい、それに続けてザクヤリツク・ドムなど、我々防衛部隊でも、今も回収作業を続ける部隊の者でもないMS隊が敵艦隊へと向かって飛んで行く。その光景を見た私は、ただ一言

「…良かった」

と、友軍を守り切り、自分自身ももう安全だと、そう思った私はそのまま意識を失ってしまふ

この後連邦軍第2戦隊はたまたま軌道付近の宙域で演習していた第603技術試験隊を始め、周辺に展開した部隊をかき集めて急造さ

れた救援部隊と交戦。両軍ともに大きな損害を受け、連邦軍は作戦目標の達成は不可能と判断して後退。多大な損害を出しながらもH L Vを守り切ったジオンの戦略的勝利と言う形で後の世に地球軌道会戦、と呼ばれることになる戦いは幕を閉じた